# ドレインホッパー　R・N・O/1

夜方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドレインホッパー　　Ｒ・Ｎ・Ｏ／１

【Ｎコード】
Ｎ９１９３Ｕ

【作者名】
夜方

【あらすじ】
二人の男
四人の女
有象無象のクソヤロウども
最低のマチ　悪徳のマチ

# ドレインホッパー　1

その日、町では蝉が残り少ない寿命を使い果たさんばかりに鳴いていた。
ヒイラギは食料品の入った大きなビニール袋を両手にぶら下げ、町から帰る途中だった。
朝の時点で食べるものは何もなくサカキとどちらが買い物に行くかで揉めたわけだが、話の途中でヒイラギは自分が買いに行くと告げた。サカキの理屈はいつもメチャクチャで、話が長くなりそうな事もあったが、何より今年の夏は例年より過ごしやすかったから二人で揉めて時間をグズグズと消費するよりは、自分が買いに行ったほうが早いと踏んだわけである。
町のショッピングモールまで出かけるのは億劫ではあったが、やはり気になる程の暑さではなかった。
気になるといえば蝉の鳴き声くらいのもので、それは町からマチへ入っても変わることはなかった。
「生きてる時間は少ないってのに、他に何か……」
ミンミンとうるさいそれに苛立ちの言葉を吐き捨てようとするが、二十二の身空を重ねてしまっているようで、ウンザリしては言葉が続かない。
「……俺も、他に何かする事あんじゃねえか？」
口に出してしまうと尚更ウンザリした。

マチではいつもと変わらぬ風景が広がっている。
いつもと変わらぬマチ並と、いつもと変わらぬチンピラ同士が揉めている姿。
チンピラが揉めている事自体はいつもの事だが、毎回違う顔のチンピラが揉めているのだから、ヒイラギはそれが不思議でならなか

った。
マチの大きな通りを二つ目の十字路で左に曲がると、いつもの忌々しい建物が見えてきた。サカキいわく、居住空間兼事務所というヤツらしいが、味も素っ気もない二階建てのビルだか倉庫だか分からないその建物は、かつての外観が白かったと思える名残がほとんど分からない程、落書きやら汚れが酷かった。
サカキに言わせるとモノトーン調で恰好いいとの事だが、ヒイラギに言わせるとただのボロビルだった。

ボロビルの角を曲がると玄関の前にサカキがいた。
ネクタイこそしていないものの、夏に細身のスーツを上下でしっかりと着こみ、しゃがみこんでいる姿を見ていると、とうとう頭がおかしくなったのかと思えてくる。
対照的にポロシャツにカーゴパンツ姿というラフな恰好のヒイラギは、呆れながらも声を掛けた。
「お前、それ何？」
ヒイラギを見上げたサカキの、真っ赤なビーズを幾つも編みこんで作られたリング状のピアスが、左の耳で少しだけ揺れた。
サカキは子供が宝物を見せるような満面の笑みを浮かべると
「これ、見つけたんだよ。懐かしいだろ」
右の手のひらを広げた。
そこにあったのは五百円玉大の半円の形をした黄色いプラスチックゴムのおもちゃ。ゴムをへこませて裏返しておけば、暫くしてパチンと音を立てて跳ねるというヤツである。
「……じゃなくて、お前のそのカッコ」
自分の姿を上から下まで見渡すと、サカキは「男としての身だしなみ」とだけ答えた。
何故か、カチッとした恰好には似つかわしくなく足元はビーチサンダルだったが、ヒイラギは指摘する気力も失せ、何だか一気に疲れたという感じでサカキの前にどっとしゃがみこんだ。

サカキはゴムのおもちゃをへこませると「こういうのにはコツがあるんだ」と本当にあるのかないのか分からないコツの話をしながら地面に置いた。
程なく、それはパチンと音を立てて高く飛んでいった。
思っていたより高く飛ぶ。重力の存在を忘れたように、高く、高く飛んでいく。
それを二人は目で追った。
白い雲。
その雲間から一瞬顔を出した突き抜けるような青空と、夏の陽が、ゆっくりと順を追って二人の目に飛び込んでくる。
二人の目の前が真っ白い光で覆われていく。
そして少し気が遠くなる。

二人は軽く、立ち眩みを起こしていた。

∞ロッソ・ネロ　ウロボロス∞
ドレイン　ホッパー

＞i２７３５４―１２９９＜

１

「さっき、クロツチさんから電話があったよ」
サカキが買い物袋から出したビールをコップに注ぎながら言った。
ビールは買ってきたばかりだというのに温く、氷を入れなければならなかった。
文明の力というのは素晴らしく、買い出しに行かなければならない程何もない部屋ではあったが、水さえ入れておけば我が家の冷蔵

庫では着々と氷だけ量産されている。
氷を入れた為、ビールは水っぽくなってしまったが、なかなかに喉越しは良く、ボロビルの二階も快適とはいえないまでも風通しは良かった。
二階の踊り場に、サカキが早速ゴクゴクと小気味良く喉を鳴らす音。
喉を通過していった爽快な刺激を満喫するサカキをヒイラギはなんとなく見つめ、そしてなんとなく思った。

クロツチさんからの電話。何度この言葉に胸を躍らせた事だろう……。

クロツチさんはこのマチで最大の勢力を誇るネロファミリーの幹部であり、知り合って以来、このビルを貸してくれたり、仕事を紹介してくれたりと良くしてくれている。
そして何より、クロツチさんや同じくネロのスバルさんは組織に入るよう勧めてくれているのだ。
組織の一員になる。そうすれば、どれだけ少なく見積もっても今より生活は格段に良くなるはずだった。
少し前までのサカキならそう考えていたはずだったし、それが一番自然な流れでもあった。
ところが何を思ったか、サカキは「何でも屋」になると言い出した。
勿論、ヒイラギは反対したが、その度にサカキのわけの分からない理屈による反論にあい、何の解決も見ないまま気づけば現状に甘んじてしまっていた。
正直なところを言うと、それでも良いかという楽観的な部分がヒイラギにあった事も認めなければならない。だが、本当の問題はそこからであった。
ある日、殺しの依頼があった。それも高額のヤツだ。ほっと胸を

なでおろすヒイラギの隣で、サカキは愛想笑いを浮かべるとあっさりと言ってのけた。
「ああ、それは無理な相談ですね。俺たち殺し屋じゃないんで」
そうなのだ、サカキは「何でも屋」などとのたまっているくせに、仕事の選り好みをするのだ。もはやヒイラギの「それって、何でも屋じゃないし」という声も聞き届けてはもらえないのである。
いつか、サカキの心変わりあって、クロツチさんからの申し出にＹＥＳという日が来るのをヒイラギは長い目で見てきたつもりだったが、やはり今日もその日ではなかったようだ。
こういうのは何となく分かるものだ。というより気づけば何となく分かるくらいの長い付き合いになっていた。
腐れ縁？　いやいや、自分で望んで決めた事だ。ヒイラギもそれにだけは文句を言えない。

クロツチさんからの電話。何度この言葉に胸を躍らせた事だろう。でも気がつくと、その踊りも今では２ステップ半くらいのものになっていた。

## 2

「で、クロツチさん何だって？」
ビールを一口飲むとヒイラギは尋ねた。
ソファーに座っていたので、テーブルの上に座っているサカキを見上げる形になった。
サカキはタバコに火をつけると、鬱陶しいくらいに伸びた髪をかき上げた。

何故か髪を切るのはサカキの仕事ということになっており、ヒイラギの髪はサカキが右を、左を、とバランスを取ろうとしてハサミを入れるので短めになってしまうのに、自分は毛先を整えるだけな

ので、今では背中に届くまでの長髪になってしまった。その緩やかなくせ毛かかった長髪が、この季節には尚更鬱陶しい。

サカキは火をつけたばかりのタバコの煙を美味そうに吐き出すと「何って、仕事だよ。仕事の依頼」と答えた。

それ以外の言葉は続くこともなく、今日もクロツチさんの申し出をサカキが受ける日ではなかったという事を、ヒイラギは義理で買っている宝くじが当たらなかったことと同じくらいすんなりと受け止めた。

「詳しい内容は会ってからって事だったけど、今分かってんのは殺しとか、そういう物騒なたぐいものじゃないって事くらいだな」

いつもの事だろ、とヒイラギが内心思っていることを知ってか知らずか、サカキは続けた。

「よくは分からないけど、人助けがどうとか言ってたな」

人助け？　およそギャングの幹部が口にする言葉ではないような気がして、ヒイラギは顔が引きつった。それとも、何かギャングの間で使われる暗号や隠語めいたものだろうか？

「とりあえず、会う場所は今夜８時、駅前のジョイパルって事だったから」

「ジョイパル？　何でまたそんな所で？」

サカキはタバコの火を灰皿で揉み消すと、ヒイラギ良く気づいた、と言わんばかりに興奮気味に喋りだす。

「そうなんだよ！　ジョイパルだぜ？　トマオニならまだしもよ！　あそこのチーズハンバーグセット、トマトソースが掛かってんだよ！　ありえねぇよな？」

同意を求めるようにヒイラギを指差すが、同意を求められたヒイラギは冷静に受け流した。

「いや、そんな事じゃなくてさ。何でマチの中じゃなく、わざわざ外のファミレスで会わなきゃいけないのかって事がだよ。いわくありげの仕事なんじゃね？」

そこへ全く見当違いの反論が返ってくる。
「そんな事？　お前、何言ってんだよ。チーズハンバーグにデミソースかトマトソースかって事が、どれだけ重要か分かってないのか？　死活問題だぞ！！」
初めのうちこそ「じゃあ、トマトソースかけないでくれって店員に言っとけよ」等と言い返していたヒイラギだったが、その後も付け合せはポテトがどうとか、コーンがどうとかいう話が延々と続いていく。
結局こうなるのか、そう思うとヒイラギはガクリと頭を落とし、心の中でつぶやいた。
だったら違うメニューを頼めばいいのに……。

3

駅前のジョイパルには予定より早く着いたが、クロッチは随分前から店にいた様子で、一通り食事を済ませデザートのジョイパル一番人気の自家製コーヒーゼリーを丁度食べ始めたところだった。
クロッチが約束の時間より早く来ていたのは安全確認等の用心のためだろう。現に、いつもは閑古鳥が鳴いているジョイパルの割には、結構客が入っている。そのうちの何人かはクロッチの部下に間違いない。
マチの外では不要に血を流さないというのは、あくまでマチに住む者のルールだが、慎重に慎重を重ねても損はないだろう。
いつあってもクロッチは、およそギャングの幹部とは思えない程みすぼらしい感じがする。着ているスーツなど結構良いブランドの物なのだろうが色あせて、一見リストラされたサラリーマンにしか見えない。
クロッチという男――ぼさぼさの頭／疲れたような風体／しわだらけのシャツ／深く刻まれた目頭のしわ／しかしそこから覗く鋭い

眼光／薄汚れたマチの？盤上の支配者？（ゲームメイカー）――最大組織ネロファミリーの？2

そのクロツチの両隣に見知らぬ男が二人座っていた。
一人は恰幅の良いサラリーマン風の中年だが、顔にひどく疲れの色が見える。何の注文もしていない様子で、水にすら口をつけていない。
もう一人は若い男で、夏だというのに黒の長袖シャツに手袋をしっかりとはめている姿はボロビルの前でサカキを見つけた時と同じような異様さが感じられた。重めの前髪から除く目は細く、一見すると笑っているようにも見えたが、そこから表情を読み取ることは難しかった。目のふちには何日も眠っていないのか、はっきりとした隈ができていた。彼の前には申し訳なさそうにアイスコーヒーがちょこんと置かれていた。
サカキとヒイラギがドリンクバーのコーヒーを持ってきて、厨房側テーブルの三人の前に座りなおすと、まだゼリーは三分の一ほど残っていたがクロツチはスプーンを置いて口を開いた。
「こちらは、M市在住の藍沢さん。スギモト製薬の部長さんだ」
サカキ達から向かって、一番左に座っている恰幅の良い中年が頭を下げた。
このマチから百キロ以上も離れた町からサラリーマン親父が何のようだ、とヒイラギが訝しんでいるとサカキが口を出した。
「商売敵のナントカを殺せ、とかいう類の依頼ですか？」
単刀直入。落ち着いた口調ながら疑いの目を向ける。
場を制するように、クロツチが両の手のひらを広げた。
「まあ、待て。話は最後まで聞くもんだ。それに、そういう依頼は受けないってのはちゃんと分かってるよ」
そういうと、一番の上客なのに、一番仕事の依頼を断られてきた男は狐のように目を細めてニヤリと笑うと、事の経緯を説明し始めた。

「今から丁度、一ヶ月前の話になるんだが……」

4

今から丁度一ヶ月前の六月三日、スギモト製薬部長の藍沢真人(あいざわ まさと)は特に立て込んだ仕事に見舞われることもなく帰宅の途についた。会社を出たのは夜の七時を少し過ぎたところだった。

道路は家路へと帰る車で渋滞ぎみだったが、十年前にM市内にマイホームを購入しており、徒歩で通勤していた為、憂鬱な渋滞も人事のように横目で見るだけで済んでいる。

その代わり、憂鬱なローンはあと二十年残っているのだが……。

会社を出て、二十分程でマイホームに到着した。出迎えたのは妻の清海(きよみ)だった。

いつもと変わらぬ普通の一日。ただ、清海がいつもより長男の真尋(ひろ)の帰りが遅いと気にしていた。

真尋のバイトは七時までだが、お腹を空かせた真尋は七時半には自転車を急がせて帰ってきているのに、時刻はもう八時になろうとしていた。途中で事故にでもあったのでは…、というのである。

「真尋だってもう十七歳になるんだぞ。少しくらいの夜遊びだってしたくなるだろう？」

真人は笑っていた。

清海は一応納得してみたもののやはりどこかオロオロしている。

「これは当分、子離れできそうもないな」

真人は一人つぶやくが、自分のことは棚に上げている事に気がついて少し照れ笑いを浮かべた。

あの小さくて、泣き虫だった真尋がもう十七歳とは……。

年月の流れの速さを感じてしまうようで、嬉しくもあり、何だか少し寂しい気もする。

ああ、そうだ。来月の真尋の誕生日にはパソコンを買ってやろう。

お姉ちゃんのお古は嫌だって言っていたな……。仕事を終えてのビールに野球中継という至福の時を過ごしながら、そんな事を考えていると長女の真潮(ましお)が帰ってきた。
真潮は大学のサークル活動がいつもより早く終わったと清海に話していた。
時刻は八時半になっていた。清海が真潮に真尋が帰って来ていない事を伝えると
「真尋ももう高校生なんだから、友達と遊んでて少し遅くなる事くらいあるって。お母さん心配しすぎだよ」
と、母親をたしなめていたが、そのうち
「ひょっとしたら女の子かもよ。真尋も意外とすみに置けないからね」
と、たしなめているのだか余計に心配させているのだか分からない事を言って、少し意地悪そうに微笑んだ。
真人もまた、微笑む娘の顔を見て口元を緩めた。
美しい娘に育ってくれた。二重瞼のはっきりとした瞳に鼻筋は通っているが高すぎず、尖った顎を駆け上がった先にある唇は薄く小さかった。顔というキャンバスの上で全てのパーツが整っていた。福笑いを目隠しなしでやった様に、後から目や鼻や口を均等に貼り付けていったような精密さは、一種の芸術品だった。それだけで見れば表面的な美しさばかり際立って冷たさすら感じられそうだが、そうではなかった。何ともいえない愛想の良さが滲んでいる。
真人がぼそりとつぶやく。
「あれは母親に似たんだな」
背はあまり高いほうではなかったから、それは自分に似たんだな、などと考えているとまた口元が緩んだ。
弟の真尋もまた、整った目鼻立ちをしていた。二人ともおっとりとした性格のせいか、三歳離れた姉と良く似ていると親戚たちには言われるが、本人は女の子みたいだと言われている気がして嫌なのか、隠れて体を鍛えていることを父は知っていた。いや、たぶん家

族みんなが知っているのだろう。
なんにせよ、この年になっても姉思い、弟思いの仲の良い姉弟でいてくれている。それが何より父にとっても、母にとっても喜ばしいことであった。

5

野球は巨人が一点ビハインドで追う側だった。これから後半戦へ突入するところだったので、まだまだ逆転のチャンスはある。真人は大の巨人ファンだった。ビールを一本飲み終え、空になった缶をテーブルに置くと、自然に左の拳に入っていた力が抜けた。
そこへ真潮がすかさず「お腹が空いた」と言い出した。清海も真潮も隣のソファーに座っていた。ビールが空になるのを見計らっていたのだろう。
野球に夢中になっていたから忘れていたが、さすがに真人も空腹感を覚えた。
「真尋には悪いが、先にご飯にするか」と真人が言うと「さんせ～い」と真潮が能天気な声を上げる。
清海は「じゃあ、真尋に電話してきますね」と勝手口にある電話へ向かった。時刻は九時に十分前といったところだった。
程なく清海が戻ってきたが、その顔は不安の色がより深くなっている。
「お父さん、真尋の携帯電話が繋がらないんですよ」
「バッテリーが切れただけじゃない？」
隣から真潮が声を掛ける。それに一度だけ頷くと、真人は電話へと向かった。
やはり、真尋の携帯からは「電波の届かない所にいるか、電源が……」というアナウンスが流れるだけだった。
真人は受話器を置くと真尋のバイト先の電話番号を、電話の台に置いてある大学ノートから見つけるとその数字通りにボタンを押す。

電話が繋がる間、後ろを少しだけ振り返るとオロオロする清海の隣に真潮がしっかりと付き添っていた。
間もなく電話は繋がったが、バイト先の店長という男からの返答はそんな家族を安心させるものではなく、以外なものだった。
「そちらでアルバイトしている藍沢真尋の父ですが、真尋はまだそちらで働いてますでしょうか？」
「真尋くんでしたら、一週間程前にウチを辞めていますが……」
真人の顔をから血の気が引いた。
昨日も真尋にバイトのことを聞いたばかりだ。大変だけどやりがいがあるから楽しい。そう言っていたはずだ。あれは嘘だったのか？
心配そうに覗き込む清海と真潮に説明してはみたものの何の解決にもならなかった。
真人と真潮は、真尋の立ち寄りそうなところを虱潰しに探してまわった。清海は学校の友人、知人、親戚等、考えられる限りに電話をかけた。
だが、そのどれもが徒労に終わった。
そして、その日藍沢真尋は結局家に帰らなかった。

翌朝、家族は警察に電話した。

## 6

「警察では、藍沢さんが裕福って事もあって最初は誘拐の線も含めて考えてたみたいなんだが、何の進展もない為、家出人、行方不明人としてほとんど今では捜査らしい捜査はされてないらしい」
そこまで聞き終えるとサカキは「はあ」と、それは可哀そうにとも、だからどうしたともとれる曖昧な返事をした。
「手がかりらしいもんも全く見当たらないし、別に身代金とかの要求もないし、家出人と言われればそれまでだし、一体何なんだろうなぁ」

クロツチはタバコに火をつけ、考え込むような表情を見せた。
場の空気が、引き潮のように引いていく。
一瞬止まった時間をヒイラギが進めた。
「で、結局俺たちは何の為に呼ばれたんですか？」
まさか人を呼びつけておいて、中年サラリーマンの身の上話でもないだろう。
「道を踏み外すのが若さなら、道の途中で迷っちまうのはやはり歳のせいかねぇ？」
誰ともなしに呟いた後で、
「ああ、すまん。いや、この話の面白いのはここからでな」
クロツチはそう言うと、少し物思いに耽っていたところを見られた気恥ずかしさからか、少し顎の無精髭をかいた。
疲労困憊の当事者を隣にして、面白いもないだろうに……。

7

事件発生から一週間も経つと、警察も時々巡回のついでに様子を聞く程度になっていた。聞き込み等の捜査は引き続き行われているとの事だが、当てにはならない。
誘拐であれば何らかの要求があるはずだが、それはなかった。間違い電話の類ですら掛かってこなかったので、疑るべきものがまず見つからなかった。
警察は家出という事も考えられる、という。
まさかうちの真尋に限って、とは思うが警察が言うのだからそういう事もあるのかもしれない。これはただの家出であって、そのうちひょっこり真尋が帰ってくる。そう考えてみたところで気が楽になる事もなかった。
その頃になると真人は、すぐに動かせるだけの貯金を現金化していた。総額は二千万円になった。勿論、身代金の要求があった場合

に備えてのものだ。資産を売却したり、借金すればその十倍くらいの金は割と簡単に作れるだろうが、身代金の要求がない以上、今はこれで十分だった。
　こうして現金化しておけば急な要求にも対応できるし、何より自分はこれだけの金を簡単に用意できるのだから、息子の安全を約束してもらえるのならどんな要求にも答えられます。私はそれが出来る人間です。と、アピール出来ているような気がしてほんの少しだけ安心できた。
　勿論、ただの気休めだが……。

家族は祈る想いで待ち続けた。
真尋からの連絡を。
そして犯人からの要求を。
だが、何の進展もないまま一ヶ月が経とうとしていた。
季節はすっかり夏の様相へと移り変わっていたが、異常気象のせいか昼ごろになってもそれといった暑さには程遠かった。
真尋が帰って来るまで夏はやって来ないのではないか、口には出さないものの家族はそんな気さえしていた。

そんな折、真人はふと思い出した事があった。
この国の、犯罪という犯罪がありふれて日常化しているというマチのことを……。

遠い昔に風の噂で聞いただけなので、おそらく都市伝説の類であろうと思っていたが、他に頼るべくもなく、何よりこの一ヶ月まともに眠っていない脳が正常に働く事もなかった。
インターネットのいかがわしげな掲示板を辿り、でもとも怪しい情報を入手する。
そこに行けば何か分かるかもしれないという思いにのみ衝き動かされると、現金二千万円の入ったアタッシュケースを持ち、家族に

満足な説明をすることもなく、週末にもたまにしか走らせることのない白のセダンへと男は乗り込んだ。

8

東の果て。

潮風の香る町のすぐ間近で、そのマチは本当に存在していた。

マチの入り口に着いた頃には大分陽も落ちていたが、真人には夕方になり少し涼しいくらいだな、等と考える余裕はない。

車を降り、マチの入り口に入る頃には手のひらに油汗が滲み、背中を寒気が走った。

こんなに緊張するのはいつ以来だろうか？　右手に持ったアタッシュケース、これだけが頼りの綱だ。これだけは何があっても手放してはいけない。

一層右手に力が入る。

このマチの顔役の名前を知るのに一度、その男の居場所を聞くのに二度、命の危険を感じた。だが、殴られたり、脅されたりはしたがアタッシュケースを失うことはなくその男のもとまで辿り着くことができた。

男に会う前に一度、ケースの中身を確認されたが、現金しか入っていないという事が分かると、五分程してやってきた男が真人の前の椅子に座った。

男はネロファミリーのクロッチと名乗った。

それが昨日の今頃の話だ。

そこまで話すと三分の一程残っていたコーヒーゼリーを食べようとスプーンを持ったが、話をしていたこの数分の間に、それが食欲を全くそそらない別のものに変わってしまったかのように一瞥すると、クロッチは再びスプーンを置いた。

「藍沢さんは、息子さんが何らかの犯罪に巻き込まれてこのマチに

関わりがあるのなら、その二千万円で息子さんを救い出して欲しいと言うんだよ」
サカキもヒイラギも何となく、中年サラリーマンとクロツチの繋がりが見えてきて何度か頷いてみせた。
さっきから黙りこくっているクロツチの右隣に座った隈目の長袖男の出番までは、もう少しかかりそうだ。
「まあ、金なんてどうでもいいんだが、俺はこの藍沢さんの勇気というか、男気に感心してなあ…」
サカキが嘘つけと内心思っていることを、ヒイラギもまた同様に感じていた。
「何とか力になってやりたくてな、俺なりに動いてみた。マチの中で拉致や人身売買を専門に取り扱っているところといえば……」
「蛇咬会（スネークバイト）」
サカキが口を挟む。
クロツチが頷く。

## 9

蛇咬会（スネークバイト）。
一年程前にジャッカルと紅蓮（グレン）という二つの組織が統合して出来たそれは、最初二つの頭文字を取って邪紅会と称していたが、その後、蛇咬会となり現在に至る。ネロファミリーを最大手とするなら、中の下といった程度の組織である。
マチで大手の組織に属さず商売をするという事は、詰まるところオリジナリティを問われるということだ。
麻薬だの密輸だのという、いわゆる金になりそうなものは、正規のルートをほとんどが大手の組織が押さえている。だからといって、別のルートを開拓するとなれば、マチの外の組織、つまりヤクザやマフィアとの軋轢を生じることになる。マチの外での諍いをマチの中に持ち込む事はルールに反する為、そういったルール違反を犯し

た組織は大手の組織によって何らかの制裁を受けたり、場合によっては潰されてしまうという事も少なくない。
とはいえ、金を作る能力のない組織はどの道潰れてしまう。
そこで大切になってくるのがオリジナリティ、早い話が大手の組織が取り扱わないルール違反になるか、ならないかのギリギリのところを狙って商売出来るか、出来ないかである。
蛇咬会が取り扱う人身売買というのもこのケースに分類される。とはいえ、違反になるかならないかは非常に微妙なところであり、また、それを決める権利も大手の組織にある為、そこは寛容に見てもらうしかない。蛇咬会もネロファミリーの傘下ではなかったが、上納金だけはしっかり納めていた。
半年前まではマチの中では大して意識もされなかった蛇咬会だが、この春に同じく人身売買を生業にしており、勢いもあったＡＮ：？という組織が潰れてからは、それなりに儲かっているらしい。
ＡＮ：？が潰れる事となった一件にはサカキとヒイラギも深く関わっているのだが、その話はまた別の話だし、何よりその時の話をするとサカキの機嫌が非常に悪くなる為、二人の間でその話題については禁句となっていた。
「その蛇咬会に探りを入れてみたが収穫は無し。全く知らないって事だった」
クロツチが首を振る。
蛇咬会が人身売買を行っているとはいえ、そのほとんどは薬漬けや借金まみれの人間を安く買い叩いて売っている、その程度のはずだった。拉致めいた事もするとは聞いてはいたが、今回のようなリスクの高い仕事をするかについては疑わしい。何より、ネロのクロツチ程の大物に蛇咬会程度が嘘をつくというのは、普通に考えればありえない話だった。
「その後もファミリーの人間動かして、マチ中で情報集めてみたが、そっちも収穫は無し」
クロツチは手のひらをヒラヒラと振りながら、横目でちらりと憔

悴しきった藍沢真人の顔を見た。
「だからといって、このまま帰すのは忍びないだろう。とはいえ、俺はただのギャングだから、『な』くしちまうのは得意だが、探し物を見つけるってのはどうにも苦手でな。だったら餅は餅屋。プロに任せちまおうって事になったわけだ」
そう言うと、クロツチは真っ直ぐにサカキの目を見据えた。
急に話を振られたせいか、そんな依頼とは思ってもいなかったせいか、サカキは一瞬返答に困った。
「……いや、待ってくださいよ、クロツチさん。さっきファミリーの情報網に何も引っ掛からなかったって言ったばかりじゃないですか。って事はマチの中に息子さんがいる可能性はほとんどゼロ。マチの外を捜せってんじゃないでしょうね？　そんなのお手上げですよ」
サカキのこまり顔を十分に愉しんだ後で、クロツチはニヤリと笑った。
「言っただろ、探し物は探し物のプロに任せるってな。こちら探偵のアクビさんだ」
さっきから会話に交じらず、何の関心もない様にアイスコーヒーをチビチビと飲んでいただけの男は、いつの間に持っていたのか名刺をサカキとヒイラギに差し出していた。
「どうも、探偵のアクビです」
およそ感情らしさの感じられない喋り方だったが、細い瞳の奥が一瞬輝いて見えた。
名探偵というのは遅れて登場するものなのかもしれない。

１０

程なく、クロッチは藍沢真人をマチの外まで送ると言って店を出て行った。

クロッチに自分が勘定を持つからと言われていたので、サカキとヒイラギはようやく遅めの夕食にありつけた。ヒイラギはカツカレーを注文したが、やはりサカキはチーズハンバーグセットだった。

ヒイラギは注文したメニューを待つ間、渡された名刺を見ていた。マチで探偵を職業にしているというだけでヒイラギにはふざけた話に思えたが、名刺もまたふざけた物だった。

Ａ＆Ｈ　ＩＮＶＥＳＴＩＧＡＴＩＮＧ　ＯＦＦＩＣＥ　　アクビ

そして電話番号が記載されているだけ。

ヒイラギが顔を上げると、その当の本人は口から長細い棒のようなものを咥えていた。タバコにしては随分細いな、などと思っていたらそれは棒つきのキャンディーだった。

アクビ――最低のマチのふざけた稼業＝探偵／前傾に重く垂れ下がる前髪／それよりも漆黒の瞳／ふちの色素沈着／咥えた棒つきキャンディー＝コロコロ転がるたび辺りを包むキャラメルの匂い。

クロッチは紹介の際に、彼とは古い付き合いで、以前ルール違反を犯した組織のルート調査や、下手を打った売人の逃亡先を探し出す仕事を依頼した事があり、その仕事の内容たるや信頼に値するものだと言っていた。クロッチが言うのだから腕は確かなのかもしれないが、目の前で棒つきキャンディーをコロコロやっている姿を見る限りではとてもそんな風には見えない。

結局、サカキとヒイラギの仕事の内容はというと、アクビの助手及び有事の際の対応　（暴力的解決含む）というものだった。
報酬は二人で三百万円。
悪い金額ではない。だが、話を聞いていくとマチの情報収集と蛇咬会への探り、及びアクビやサカキとヒイラギの紹介料としてクロツチが手にする金額が一千万円。アクビが七百万円という内訳になっていた。
分配された内訳に当然納得のいかないサカキがクロツチにくってかかると、自分の事は棚に上げてサカキを諌める。
「探し物はアクビさんがやってくれるんだぞ。アクビさん一人でも十分なところへ、アクビさんたっての希望で手伝いを紹介して欲しいというから、こうしてお前たちに仕事を回してやってるんだ。言い換えれば、お前たちはアクビさんと一緒にいるだけで三百万稼げるかもしれないんだぞ。いい話だろうが」
報酬の分配の話を勝手にされているのを隣で聞いていた藍沢真人は、自分の財産をハゲタカに食い散らかされているみたいで、どんどん青ざめていった。
それを思い出してヒイラギは笑いそうになる。
とはいえ、息子が見つからなければ経費くらいは出るだろうが、三百万円ふいになるのだから楽観的に考えてもいられない。頼りは目の前の男だが、見るたびに心細さは増していくばかりだ。
そんなことを考えていると、ようやく運ばれてきたカレーもなかなか進まない。そんなヒイラギとは対照的に、サカキはあれだけ難癖をつけていたチーズハンバーグセットをペロリとたいらげた。
「やっぱり俺は、蛇咬会が怪しいと思うけど……」
紙ナプキンで口を拭いながら仕切りなおしとばかりにサカキがそこまで喋りだすと、小さくなったキャンディーをガリガリとかじりながらアクビが右の手のひらを広げてストップを掛けた。

左手で棒つきキャンディーの棒だけそっと取り出すと口を開いた。
「今日はもう遅いので、詳しい話や打ち合わせは明日私の事務所で」
ヒイラギはもう一度名刺を見たが、やはり住所は書いていない。名刺をペラペラと振りながら指摘する。
「載ってないけど、住所」
意に介さず、といった感じで棒読みのようにアクビが答える。
「載せる必要ないですからね。私の事務所があるのは東のマンションです」
「東のマンション！？」
ヒイラギの声は驚きで裏返り、間抜けな感じになった。隣に座るサカキはあくまで冷静を装ってはいたが、興味津々なのは瞳の輝きで見てとれた。

## 11

マチに住む人間なら誰でも知っている建物が二つある。
それが北の塔と東のマンションだ。
誰でも知っているといえば聞こえが良いが、単にでかくて目に付くというだけの話。
北の塔には一つの伝説がある。それはマチの王についての伝説。
そんな事もあって塔はマチの象徴だった。皆が塔と呼ぶのでヒイラギもそう呼んではいたが、実際のところヒイラギにとってそれはただの煙突にしか見えなかった。
現にヒイラギが子供の頃、それは確かにラサ工場の煙突と呼ばれていたはずだ。
住む人間が変われば呼び名も変わるもの。そんな事をしみじみと考えていると、サカキ以外の知り合いに会うこともないこのかつての故郷に、淋しさを覚えたりしたものだ。
その北の塔と同じくマチの代表的な建物が東のマンションであったが、こちらは北の塔の様な歴史もない為、純粋にただでかいだけ

の建物だった。
人から聞いた話によれば、十年程前のマチの開発が途中で打ち切られた為の負の遺産という事らしい。造られた部屋より、中途半端に手を付けたか付けないかで放ったらかしにされた部屋のほうが圧倒的に多く、その巨大な廃屋はさながら命の価値の薄っぺらいこのマチの巨大な墓標のようであった。
好奇心に衝き動かされたサカキが質問しようとするのをいち早く嗅ぎつけたのか、アクビは「明日の昼十二時ということで」と機会のアナウンスのように抑制された声で告げると、足早にファミレスの出口へと向かった。
アクビの地味な後姿を眺めながら、ヒイラギもまたサカキが質問しようとしたであろう事を考えていた。

――探偵ってのは墓荒らしもするのかい？

## 12

アクビとの約束のためにいつもより早く起きたサカキとヒイラギだったが、それでも十時を過ぎていた。
身支度を整えるのにヒイラギが十分とかからなかったのに対し、自らのスタイルだと豪語する零れ落ちそうなナチュラルリーゼントヘアを作り終えるのにサカキは三十分以上を要した。そんなわけでノンビリというよりほとんどグズグズに近い時間をかけて事務所兼住居を出た頃にはだいぶ陽も高くなってはいたが、外はやはり気になる程の暑さではなかった。それほど暑くないとはいえ、男のたしなみとして上下スーツを着込んだサカキも、さすがにジャケットは脱いで肩に掛けていた。

＊

サカキもヒイラギも遠くから眺めるだけで、東のマンションに行ってみるのは初めてだった。マンションに近づくにつれ周辺には雑草が生い茂り、用途不明のスクラップが積み上げられた山が出来ていたが、マンションまでは細いながらも一本道が通っていた。

マンションの入り口まで来るとご丁寧にＡ＆Ｈ　ＩＮＶＥＳＴＩＧＡＴＩＮＧ　ＯＦＦＩＣＥ　３０２号室と看板が掛かっていた。

実際のところ、３０１号室も３０３号室も骨組みだけで存在してはいなかったが、３０２号室は一応部屋として成り立っているようだ。どういう造り方をすれば、こんな風になってしまうのか、ヒイラギは不思議で仕方がない。

アクビが「ようこそ」と昨夜と同じ無表情で迎えてくれた。

部屋の中は、サカキやヒイラギが見たこともない機材　（サカキいわくハイテク機器）やファイルされた書類が棚一面に敷き詰められたりしていて、事務所としての見栄えはなかなかのものだった。それに引き換え自分たちの事務所といえば、サカキの趣味が反映された造りになっている。聞こえは良いかもしれないが、どこから拾ってきたのか分からないほとんどガラクタに近い物がところ狭しと置かれている。ヒイラギはその有様を見ながら、これは事務所というよりオモチャ箱だな、と違う意味で感心していた。

事務所の椅子に座るようアクビに勧められ二人が腰掛けると、程なく隣の部屋から赤毛のショートヘアに長身の女が飲み物を持ってきてくれた。

髪の毛と同じ真っ赤なタートルネックのニットの長袖に黒いショートパンツを履いていた。上半身は首までスッポリと着込んでいるのに、ショートパンツ姿で惜しげもなくスラリと伸びた長い足を出しているので、よほど足に自信があるのかもしれない。何にせよモデル並みのプロポーションと少しきつめながら綺麗な顔立ちには赤が良く似合っていた。

ただし、綺麗とは言ってもその女もアクビ同様生気が感じられず、その女とアクビが一にいる所を見ていると蝋人形とアンドロイドが暮らす部屋にいるようで妙に居心地が悪くなる。ちなみに、持ってきてくれた飲み物もただの水だった。

「パートナーのホオズキです」

アクビが紹介する。

赤より紅いショートの赤毛（ジンジャー）／冷淡さすら漂う美貌は機械的なまでに無表情／恥かむ事無き（ノット・ジンジャー）突き出た美脚――猟犬の如き筋肉質＝美しくも艶なき脚／A&HのH＝ホオズキ。

アクビに振られてもホオズキは表情を変えることも何か挨拶するでもなく、ただほんの少しだけ会釈してさっさと部屋を出て行った。

女が部屋から姿を消すやいなや、サカキが「お前の女か？」と質問した。表情にこそ出していないが、興味津々なのは瞳の輝きでバレバレだった。

サカキは日頃からスタイルがどうだとか、スマートに生きるとはどういうことなのか等と偉そうに語っているが、ヒイラギに言わせればサカキはただの好奇心の塊だった。

質問を聞いていなかったのか、面倒くさかったのかアクビは「優秀です」とだけ答えた。

その話を続けても何の進展もないことを感じたのか、サカキは「何として」と突っ込んで聞くことはなかった。

ただ、ヒイラギが横目で見たとき、サカキは少しつまらなそうな顔をしていた。

## 13

アクビは出された水を一口飲むと、仕事の話に取り掛かった。

「現状では、ほとんど手掛かりらしいものはありません。昨日も聞いた通り、ネロファミリーの情報網に引っかからなかったということは、藍沢真尋がこのマチにいる可能性は限りなくゼロ。それには

私も同意見です」
　サカキもヒイラギも頷いた。
「ただ、もしこのマチにいる可能性があるとすれば蛇咬会が何か関わっている。それは避けられないことです」
　そう言ってサカキの目をじっと見つめる。
　そのアクビの考えに、サカキが昨夜言いかけた自分の意見を継いだ。
「もし、蛇咬会に何かネロにばれたら困るような秘密があって、自分たちの周りを嗅ぎまわられたらまずいと思っているなら、知らない振りを決め込むだろう。本当にまずい秘密なら、リスクを冒してもクロツチさんに嘘をつくって事も俺は十分にありえると思う」
　今度はアクビが頷いた。
「本来ならば、情報を集め、整理してから行動に移すのが私のスタイルなのですが……」
　藍沢真人には、後日家族や知人に情報の聞き取りに行くということで了承を得ていた。
　少し躊躇った後、アクビが続けた。
「時間が勿体ないということもありますしね。私たちにとって近いところから当たっていきましょう」
　せっかく互いの意見が噛み合ったところではあったが、ヒイラギは口を挟んだ。
「って言っても、俺たちが話を聞きに行ったところで、クロツチさん以上に何か情報を掴めるとも思えないけど」
　アクビは全く困る様子がない。
「それはそうでしょうね。ですから、連中の倉庫、いや連中風に言うならば、農場を直接調べてみようと思います」
　蛇咬会の連中が、自分たちが買い叩いてきた人間を詰め込んでいる倉庫のことを農場と呼んでいることは知っていた。わざわざ人間を盗みに来る物好きもいないだろうから、セキュリティーはたいした事ないのかもしれない。とはいえ、簡単に侵入できるというもの

でもないだろう。
ヒイラギがその質問をしようと口を開きかけたところへ、アクビがズボンのポケットから名刺サイズのカードを取り出した。
「農場のカードキー用のカードです。昨日のうちにホオズキに調べて作ってもらいました」
サカキもヒイラギも感嘆の声を上げる。

なるほど、優秀だ。

## 14

話が終わると、すぐに三人はアクビの事務所を後にした。早速、農場へ行ってみることになったのだ。
アクビによれば農場のセキュリティーや出入り等は全て前もって調査済みであり、丁度今頃が手薄だというのだ。
ここまでくると手際が良いという事を通り過ぎて、全部アクビが仕組んでいるのではないかという不快感すらあったが、こういう面倒な仕事はさっさと片付けるに越したことはないのでサカキもヒイラギも断る理由はなかった。

マンションの入り口まで来ると「出口はこちらです」というアクビの先導で、来た道ではなくマンションの裏に連れて行かれた。
そこにもまた、雑草とスクラップの間を抜ける細い一本道が続いていた。良く見ると、スクラップの影になってはいるが、一本道は間隔を置いて数ヶ所にあるようだ。
アクビに連れていかれた一本道の前に、年季の入ったアーモンドグリーン色をした小さな車があった。
「ミニだ！！」
サカキが声を上げた。
そのローバーミニクーパーは、古いながらもしっかりと手入れが

されており、乗り手の愛着が感じられる。
「これに乗っていきましょう」
アクビが取り出した鍵でロックを外す。
車に乗るのも久しぶりでテンションの上がるサカキとは対照的に、こんな小さな車に男三人で乗っていくのかよ、とゲンナリとしたヒイラギは運転させてくれと必死にアクビを説得するサカキを横目に、さっさと後部座席に乗り込んだ。
アクビが折れるのに時間を要したため、その間、車の中では蒸し風呂状態を味わう羽目になり、ヒイラギは更にゲンナリした。

## 15

マチの南側には港があった。
マチにはいくつかの重要な拠点があり、港もその一つだ。
港を支配する組織は小規模ながら、マチの中では重要な意味を持つ組織の一つである。港の付近一帯にはその組織の所有物たる大小のコンテナが無数に建ち並び、倉庫街と呼ばれている。マチの組織のほとんどがそれを利用しており、蛇咬会の農場も例外ではなかった。
サカキの意外な程の安全運転で三人が倉庫街に着くと、時刻は午後一時半を過ぎたところだった。アクビは前もって調べておいたのであろう、農場からは死角になる斜め向かいの倉庫の裏に車を停めさせた。
農場の入り口前には男が二人見張りに立っていたが、隣り合った倉庫に人影はなく昼間だというのに静かなものだった。
目を凝らすと農場と右隣の倉庫の間の、人一人が通れる隙間で猫が一匹昼寝をしていた。
マシロと呼ばれるその黒猫は、死と同居するこのマチで自由気ままに生きていた。なぜ黒猫なのにマシロと呼ばれているのかは知らないが、随分古くからマチに居ついているようで、その彼　（彼女

？）　が長い歴史を刻む間に、マシロに横切られたら組織が滅びるだの、マシロに触ることが出来たヤツは大物になれるだのという都市伝説的なことまで囁かれるようになった。こんなマチで都市伝説もないだろうに、暇なヤツというのはどこにでもいるものだ。

その不幸だか、幸福だか良く分からない象徴はさておき、こんな昼間から襲われるということなど想定していないのか、扱っているものがたいした事ないのか、どちらにせよ農場周辺は有難い程の不用心さだった。

アクビの言っていた通り見張りの人数にしろ、セキュリティーにしろ、確かに穴場の時間帯のようだ。とはいえ、見張りが二人いるという事実を解決しなければならないことに変わりはない。

サカキがアクビの顔を見る。

「何かいい方法、考えてあるのか？」

アクビは事もなげに「勿論です」と答えると、助手席のアタッシュボードをゴソゴソと漁り、中から二つの黒いニット生地の物を取り出すと、サカキとヒイラギに手渡した。

それは覆面だった。

目だし帽という名前らしく、雪山なんかで被るやつだ。これで銀行でも襲えば、さまになりそうだ。

ヒイラギは吹き出しそうになる。

やれやれと首を回し、コキンと音が鳴るのと同時に運転席のドアを開けると、サカキは覆面を持つ手にも力なく、だるそうに外に出た。運転席に掛けておいたジャケットを羽織ると、右ポケットから出したタバコを口に咥え、身を潜めていた倉庫の裏を迂回するようにダラダラと歩いていった。

サカキの後ろ姿を見送りながら、ヒイラギは窮屈な後部座席から這い出た。

――さて、仕事の時間だ。

ストレッチを始めたヒイラギに、アクビが声をかける。
「サカキさんには言い忘れましたが、くれぐれも殺さないように」
「はいよ」と返事するヒイラギの声には、さっきまでとは打って変わって明るい響きがある。
ストレッチを終え、覆面を被りその姿をサイドミラーで確認すると、今度は本当に噴き出してしまった。
「戦闘準備、完了」
小声でつぶやくと、足取りも軽く見張りの男たちの方へ向かって、真っ直ぐに歩き出した。

## 16

見張りの男たちは、昼下がりのひと時を退屈そうに過ごしていた。そこには緊張感というものは微塵も感じられなかった。
一応、組織の見栄の為にこうして見張りとして二人で立っているわけだが、当の本人たちでさえ見張ることの必要さに疑問を持っているのだろう、見張りに立っているというより、持ち時間を消化しているといった方が正しいようだ。
そんな調子なので、覆面を被った男が呑気に歩いてくるのを見つけたときも冗談だと思ったのか、ヘラヘラと様子を見ているだけだった。それでも、近づいて来る覆面男に一応「止まれ」とか「向こうへ行け」だのとは言ってはみたものの、いまいち迫力のある言葉が思いつかず二人でどういう脅し文句が効果的かと話しあっていたら、覆面男は予想以上に近くまでやって来ていた。相変わらず足取りは軽い。
農場の入り口まで、あと5mといったところでようやく男の一人が銃を身構えた。それにつられるようにもう一人の男も銃を抜いた。二人ともロシア製のトカレフを握っていた。安価な割に素人でも扱いやすい為、結構マチでも出回っている。
見張りの二人は銃口を覆面男に向けながら、止まるよう命令した。

＊

ヒイラギはようやく立ち止まった。
しかし、見張りの二人はその後の対処の仕方に困ったようで、結局、農場まで歩いて壁に手をついて動かないようにしろと言う。
ヒイラギは命令された通りに農場まで歩き、入り口に向かって右側の端近くの壁に両手をついた。
見張りの二人は、ヒイラギを取り囲むように銃口を向けたままゆっくりと近づいていった。
ヒイラギの右後方から近づいていった男の一人が覆面を剥がそうと左手を伸ばした時、ヒイラギが両手をついている壁の角から、もう一人の覆面男が現れて男のこめかみに銃を突きつけた。
「はい、そこまで」
咥えタバコをしながらの言葉は少しどもりがちである。
サカキの銃をこめかみに突きつけられた男は、力なく持っていたトカレフを地面に落とした。
もう一人の見張りの男は、背中越しに銃口を向けている覆面男と、相方のこめかみに銃口を突きつけている覆面男の間で視線を行ったり来たりさせていたが、相方があっさり銃を手放し降伏を示した瞬間、一瞬だが完全にサカキの正面を見据えた。
サカキがその瞬間を事前に予想していたかのように、男の目に向かって紫煙を吐き出す。
「……っっ！！」
男が声にならない悲鳴を上げる。
その悲鳴と同時に、ヒイラギは男の持っていたトカレフを左手で押さえ、隠し持っていたナイフを持つ右手を男の首の頚動脈にあてがった。
見張りの男二人は、両手を広げて軽く上げ完全に降伏を示した。
それを見たサカキが、銃口を突きつけていた男の首の後ろを銃の

握りの部分で打ち下ろすと、男は前のめりに昏倒した。
ヒイラギは、殺してしまえば楽なのに、と思いつつも奪い取ったトカレフの握りで、男の首の後ろをサカキと同じように打ち下ろしてみた。
男が膝をついて倒れる。
見様見真似にしては上出来、俺って筋がいいかも、なんてヒイラギが思っていると、男はそのままの姿勢で叩かれたところを押さえ、涙を流しながら身悶えていた。
サカキがゲラゲラと笑う。
ムッとしたヒイラギが、今度は力いっぱい叩きつけてやろうと、銃を持つ手を振り上げた時、いつの間にやってきたのか覆面姿のアクビがヒイラギの後ろから声を掛けた。
「そのへんでいいでしょう」
手にはガムテープと縄を持っていた。それをサカキとヒイラギに手渡す。
気絶させられなかった事に納得のいかないヒイラギが、イラッとした口調で
「大人しくしてれば、命までは取らないから」
吐き捨てると、男は言うとおりに目と口をガムテープで塞がれ、縄で体中をグルグル巻きにされる間中、ずっと大人しく何の抵抗もしなかった。
ちらりとサカキの方を見ると、口元を緩めながら気絶している自分の担当の男の身動きを取れなくしていたが、窒息するのではないかと思うほど必要以上に巻いていた。
それを昼寝から目覚めたマシロが遠くから呆れたような表情で眺めていたが、サカキの作業が終わるのを確認したように一度小さく啼くと何処かへ走り去っていった。
努力の甲斐もあって、彼らは二人の見張りから、二匹の芋虫へと姿を変えた。

## 17

農場の入り口は、アクビの持っていたカードを通すとすんなりとドアが開いた。

中に入ると、様々な人間の発する異臭が立ち込めて気分が悪くなった。人が二人程度歩けるスペースを残し両脇は大小の檻が幾つも敷き詰められてあった。

入り口すぐの大きな檻には、何人もの人間が男女の区別なく入れられており、その檻の隅の方にはダンボール箱にビニール袋を引っ掛けただけの、トイレとはお世辞にも言えない物が見えた。その周辺の臭いは特に酷いものだった。

奥に進むにつれ三人用、二人用の檻になっていき、最後の檻まで来ると一人用でベッドに簡易のトイレまで備え付けてあった。中の女は薬漬けで、目から生気は失せていたし、頬も痩せこけていたが、十分に美人の部類に入った。

おそらく、商品価値や従順さによって大部屋から個室へのランク分けが行われているのだろう。こんな底辺の生活でも商品としての教育を怠らずに行っているのか、と思うと意外にマメだなと変に感心してしまう。

商品は圧倒的に女が多かったので、男がどれくらいいるのかを把握するのに時間は掛からなかった。

事前に預かっていた顔写真と一人ひとり見比べてみたが、農場内に藍沢真尋の特徴と一つでも該当する男は唯の一人もいなかった。

整形の線も疑ってみたが、質問した男のうち全員が全員「自分が藍沢真尋だから、出してくれ」と答えるのでお手上げだった。見るからに四十過ぎのおっさんがそう答えたときは、呆れるを通り越して笑ってしまった。少なくともこの中に、藍沢真尋以上に「商品」としての価値のある男はいなかった。整形してまで商品の価値を落とすことはないだろう、という事で整形の線は考えないことにした。

農場内の一番奥には、簡素な造りの小部屋がついていた。一応事務室の様なものらしい。
中に入ると強烈なコーヒーの香りが辺りを包んだ。今までの異臭が酷いものだったから、歓迎してくれているような気さえしたが、事務室といっても詰まれて置いてある木箱が二つとテーブルの上にパソコンが置いてあるだけで、他に見るべきものはなかった。パソコンの脇にはコーヒーメーカーと飲みかけの冷えたコーヒーカップが置いてあった。
アクビはパソコンを起動させると、ファイルを開いた。画面に出てきたのは、今までに売買したモノも含む商品の帳簿だった。

アクビがパソコンをいじっている間、手持ち無沙汰のサカキとヒイラギだったが、サカキは木箱が気になっている様子だった。人間を入れるにしては少し小さいが、バラバラにしてしまえば問題ないだろう。　箱のふたは止め具が外されていたので簡単に持ち上げられた。サカキとヒイラギが覗き込むと、中に入っていたのは、箱から溢れんばかりになっているコーヒーの粉だった。
「キリマンジャロだな」
サカキが真剣なのか適当なのか分からない事を言っていたが、
「キリマンジャロ好きに悪い人はいないって言うもんね」
ヒイラギは適当な事を言って受け流した。
何はともあれ、辺り一面に広がるコーヒーの香りの謎は解けたのだから良しとしよう。

満足げなサカキとは裏腹にアクビの収穫はゼロだった。
藍沢真尋が蛇咬会の商品として存在していた事実がないという結論に至ってしまった以上、このマチでいくら手掛かりを探しても無駄ということになる。
マチの外の事となるとサカキもヒイラギもからっきしなので、こ

れからの事を考えるとヒイラギは溜息しか出てこないし、サカキに至っては関わっていないが為に話が面倒くさくなる事に逆ギレして「蛇咬会め！！」と何度も言いながら壁を蹴っていた。アクビが冷静に「何の手掛かりもない以上、こんな所さっさと出ましょう」と声をかけたので、大して頑丈でもない壁は穴をあけられるのを免れた。

サカキもヒイラギもこんな所はもうウンザリだったので、アクビの提案に賛成してさっさと外に向かった。途中、商品達が「出してくれ」だの「助けてくれ」だのと口々に懇願するものだから、その度にサカキの逆ギレ根性に火が点いて檻を蹴りだすのでは、とヒイラギは心配したが、それも何とか免れた。

サカキとヒイラギはさっさと外に出たわけだが、言い出したアクビはなかなか出てこない。何か手間取っているのか？　と怪訝に思うヒイラギをよそにサカキは入り口の脇でモゾモゾと動く元見張りだった二匹の芋虫の脇へしゃがみこんだ。子供が頑張って作った工作を見るように芋虫を見る目や口元が緩んでいたので、どうやら機嫌が直ったらしい。

さっきまで気絶していた方の芋虫も意識を取り戻したらしく「フゴー、フゴー」という呻き声を出していた。

「いつか蝶になって、高い空を飛んでいけますように」

そう言うとサカキはポケットから、昨日遊んでいた黄色いプラスチックゴムのオモチャを取り出すとペコンとへこませて地面に置いた。

アクビが農場から出てくるのと同時に、それはパチンと音を立てて跳ねたが、昨日ほど高くは飛ばなかった。

## １８

「さっきのあれ、ポッピンアイですよね？」
イチゴ味の棒つきキャンディーの封を開けながら、アクビが聞いてきた。
一度話を整理しようという事になり、車を走らせ適当な道路脇に停めたところだった。カーステレオの時計は二時半になろうとしていた。
サカキもヒイラギも二十二歳だったが、こういうオモチャの話題が分かるところをみれば同世代なのかもしれない。
ヒイラギから見れば、アクビは自分たちより若いようにも老けているようにも見えたが、結局、何度質問してもアクビは自分が何歳なのかは教えてくれなかった。「仕事上、支障が出ますので」という事らしいが、本当のところは分からない。

ポッピンアイの話は大して盛り上がることもなく、アクビが「さて」と仕切りなおした。
「こうなってしまった以上、やはりM市まで行って情報を一から集めなければなりません」
それはサカキもヒイラギも分かりきってはいた事だが、こうしてはっきりと口に出されるとやはり気落ちした。サカキもヒイラギもこういう回りくどい仕事は得意ではないので、とても疲れる。それが徒労に終わったとなれば尚更だ。こんな日はさっさと事務所に帰って冷えたビールでも飲みたいものだ。さっきから二人してそんな事ばかり考えていた。そんな期待を抱きつつ、サカキが
「いつ出発する？」
恐る恐る尋ねた。
「今すぐに」
淡い期待はアクビの即答であっさりと打ち砕かれた。
それでも、辛うじて食らいついたヒイラギが
「でも、オレたち。なんの準備もしてないし」
そう言うと、アクビは

「なっていませんねえ」
後部座席に置いてあったアタッシュケースを取るよう指示した。
アタッシュケースを開けながら
「私なんかいつでも準備万端ですよ」
少し得意げにアクビは顎を上げた。
アタッシュケースの中には下着や靴下と共に、ウンザリするほど黒の長袖シャツが何枚も入っていた。

結局、サカキもヒイラギも二人の事務所に一旦戻り、準備が出来次第出発するという事で納得した。
とはいえ、後ろ髪引かれる想いのサカキのノロノロ運転で、事務所までの道程は必要以上に長く感じられた。

## ドレインホッパー　3

１９

ヒイラギは窮屈な後部座席で、窓越しに外を眺めた。
背中を預ける後部座席右の窓側は、後輪の振動が直に響いて背中のあちこちを軋ませる。気にならないというには程遠いながら、それでも事務所で準備してきた衣類やらタオルやらをあてがうと窮屈ながらも何とか横になれるまでになった。
のどかといえば聞こえが良いが、他に代わり映えもなくただ続いていくだけの山間の景色。それをヒイラギは気を紛らわすようにして見つめる。

夏の日の樹木の葉の明るい緑は重なり合い、その合間から森そのものが湛える闇にも等しい深い緑が覗いていた。
深緑を見るたびヒイラギは思い出す。
それは犯罪イコール都会的という認識のもと、まさか自分達の故郷たる田舎町が「マチ」と呼ばれる犯罪の巣窟になっていたという事にそれなりの衝撃を受けた、今よりもずっとずっと若かった頃の思い出。
まだマチに来たばかりで右も左も分からない当時、何かと面倒を見てくれたジジイは言ったものだ。

お前ら馬鹿か？　例えば殺人事件に巻き込まれる人間に対して、行方不明者の割合がその何倍になるかって事が分かってねえだろ。それこそ殺人事件がやりたきゃ都会に行きな、そんで完全犯罪がやりたきゃここいらのひと気のない森にうめりゃいい。
要は見つかるか、見つからないか。事件になるか、ならないか、それだけの話だ……。

ヒイラギも今ならなんとなくその意味が分かる気がする。
一見のどかなイナカがイコール平和ではないということ。
イナカなればこそ貧しさは直接的に内を滅ぼす毒と成り得るし、外から救いの手が差し伸べられないまま滅びの道を逝く可能性だって無くはない。
だからこそ一見のどかなそこが犯罪の温床になりうるのは、逆説的なものなのだろう。

――物事の表面と本質は別物なのだ……。

車はようやく峠に差しかかる所だった。
M市までの道程は山道を抜け、峠を越えなければならない。
山道では蝉の鳴き声も一段とやかましく、マチでの鳴き声を合唱団とするならば、ここいらでは宛らオーケストラといったくらいの破壊力があった。
事務所を出発してから一時間が経とうとしている。マチからM市まで片道二時間が相場だが、サカキの安全運転では少なく見積もっても三時間は掛かるだろう。そんな事を考えながら、ヒイラギはズボンに取り付けてあるヒップバッグからタバコを取り出すと火を点けた。バッグは少し大きめで、昼間出したナイフもそこにしまわれている。
ゆっくりと煙を吐き出すと、ふと、それが今日初めて吸うタバコだというのに気がついた。

サカキは緑のパッケージのメンソールを愛飲している。
自分なりに格好良いタバコの吸い方の定義というものがあるらしく、常日頃からそれを実践しているうちに気づけば相当なヘビースモーカーになっていた。その癖、時々タバコの吸いすぎで具合が悪いなどと言っているので、どこからどこまでが格好良いということ

になるのか、その境界線がヒイラギには分からない。
ヒイラギは同じ銘柄の、赤いパッケージのタバコを吸っている。サカキのものよりニコチンは多目ながら、それほど依存はしておらず、体に取り入れられる煙の量は格段に少なかった。

## 20

車の中は静寂に包まれていた。
アクビの車にはカーステレオが付いていたが、ラジオしか聴けなかった。その唯一聴けるラジオですら峠に近づくにつれ受信状態は悪くなり、とうとう五分ほど前に砂嵐の音しか聴こえなくなると電源が切られた。
アクビはキャンディーをコロコロと口の中で転がしているだけだし、ヒイラギは乗り心地の悪さで参っていた。居心地の悪さからか、サカキは出発してから早くも四本目のタバコに火を点ける。
ヒイラギは途中のパーキングで買った飲みかけの缶コーヒーの中に灰を落とす。興味本位で買った、そのメープルローストバニラ味のコーヒーは必要以上に甘すぎて、とても最後まで飲める代物ではない。
静寂に耐え切れなくなったかのようにサカキが沈黙を破った。
「蛇咬会の連中が絡んでりゃ、何もM市なんかに行かなくても済んだのにな」
運転中のサカキは正面を見つめたまま、誰にというわけでもなく話しかける。
アクビは相変わらずキャンディーを口の中で転がしている。コーラ味の香りが後部座席まで漂ってくるようだ。ヒイラギは何か返答しようかとも思ったが、その元気もなく沈黙を守っている。
三十秒ほど過ぎたところで、アクビがようやく口を開いた。
「もともと蛇咬会が関わっている可能性は、万に一つもないと私は思っていましたから、仕方のないことです」

蛇咬会を調べるという当ての外れた考えはあくまでサカキの案だ、と言われた気がしてサカキは少しムッとする。
「それで行こうって、最終的に決めたのはアクビだろ」
サカキの反論に、間髪いれずにアクビが返す。
「そう言わなかったら、あなた達はやる気を起こさなかったでしょう」
図星。
しかしサカキは引き下がろうとはしない。
「じゃあ、なんだ、蛇咬会の倉庫で見張りのやつら相手に、俺とヒイラギが危険を冒したのは無駄だったって事か？」
ヒイラギは、正直危険を冒すって程の事でもなかったじゃん、そうは思いながらも口には出さなかった。ただ、タバコの火を揉み消しながら、二人で勝手にやってくれ、そう心の中でつぶやいた。
背中の痛みは分散されて一時的には楽になったが、それは徐々に全身の痛みへと変わっていた。そんなヒイラギにとって、サカキとアクビの間に割って入るつもりなど毛頭なかった。
しかし、サカキの質問へのアクビの答えを聞いてヒイラギの顔つきが変わった。
「あなた方の働きは、全く無駄だったと言うことではないですよ……ただ、無駄が多いだけです。私だったら、もっと手早く出来たでしょうね」
サカキが何か言うより早く、ヒイラギが噛み付いた。
「わざわざ雇ったオレ達より、自分の方が腕も立つっていう風に聞こえるけど？」
感情を抑制しながら話してはいるが、言葉の端々に怒りが滲む。
アクビは後部座席に振り返るでもなく、正面と言うより空間をぼんやり見つめたまま、さらりと言ってのけた。
「ええ、そう言っているんですよ。私、結構強いんですよ……試してみますか？」
ヒイラギに対する挑戦状は、口からキャンディーを取られる事も

なく叩きつけられた為、挑戦状としては非常に礼儀の軽んじられたものになった。
ヒイラギが窮屈な姿勢のまま、上半身を起こした。
「サカキ、車停めろ」
ルームミラー越しに仲裁に入ったサカキが、落ち着けなどと窘めの言葉を掛けるが、サカキの目を見る限り本気で止める気は更々ないらしい。
サカキにとっては、退屈しのぎ程度の事なのだろう。ひょっとしたら、少し脅かしておいた方が今後有利な関係を築ける、という計算があるのかもしれない。
「仕方がないな」
表情を強張らせ、やれやれとかぶりを振るマネだけした後で、サカキは道路沿いのパーキングに車をあっさりと停めた。

## 21

峠はカーブが多くスリップによる事故が多かったため、小さなパーキングが所々に点在していた。
アクビは助手席のドアを開け、さっさと決闘場へと向かって歩いていく。
サカキは外へ出ると運転席に掛けておいたジャケットに袖を通した。決闘の立会いにおける正装もまた、男のたしなみなのだろう。
ヒイラギはサカキが外に出た後で運転席を倒して外に出た。出る途中ドアの脇に立っているサカキと目が合った。ほどほどにしておけよ、サカキの目がそう言っている。本当は楽しんでいるくせに勝手なやつだ、そう思いながらもヒイラギは軽く頷く。
――分かってるさ。
正直、安い挑発に乗ってしまったという迂闊さに気づきつつある

冷静さは取り戻し始めてはいたが、ここまで来て後戻りが出来るヒイラギではなかった。冷静さを取り戻せば取り戻すほどに怒りで忘れていた体の節々も思い出したように痛み始める。それはまるで自分の迂闊さを責められているようで、歩くのも億劫だったがそれを言い訳にする事は出来ないだろう。

ヒイラギはパーキングの中ほどを目指して歩き始める。パーキングといっても何の手入れもされておらず、草花は鬱蒼と生い茂り、木々の陰で少し薄暗い。

相変わらず蝉の鳴き声がうるさかったが、ふと、鳴き声が今までと違っていることに気がついた。カナカナと鳴くそれがヒグラシだ、と名前を思い出すまでに冷静さを取り戻したヒイラギが歩みを止め、アクビと対峙した。

その距離、約５ｍ。

サカキは車を停めたすぐ近くの木に背中を預けて寄りかかると、タバコに火を点けた。

二人からは結構離れた場所にいる為、わざわざジャケットまで着た割には立会人というよりは見物人といった感じ。昨日と同じくビーチサンダルを履いていたため、雑草の中に入るのを躊躇ったのかもしれない。

アクビは無造作に立ち、雑草の中で飛んでくる小さな虫を払っていた。

ヒイラギは下らない挑発に乗って、こんな薮蚊やら何やらが飛んでいる所に突っ立っている自分を悔いていた。アクビと互いに向き合って立っていると「決闘」というものがナンセンスで、非常に格好悪いものに思えてきて情けなくなった。

そのヒイラギに再びアクビが火を点けることになる。

「アクビ、お前得物は？」

ヒイラギがバッグからナイフを取り出す。

「特にありません」
アクビは両手を広げて、ヒラヒラと振る。
「ひょっとして、俺のこと舐めてる？」
ヒイラギはナイフを持つ右手に力を入れつつも腕をダラリと下げる。
「そうかもしれません」
アクビがそれを言い終わらないうちに、ヒイラギは地面を蹴っていた。
一瞬で距離が縮まる。
ダラリと下げられていた右腕は、真っ直ぐアクビの首筋めがけて伸びる。それはナイフというより、フェンシングのサーベルのような突きのような正確さと伸びがあった。
アクビの両手は下げられたまま、何の反応もしていない。
離れて見ていたサカキがゆっくりとタバコの煙を吐いた。
――決まる。
そこから、アクビの頚動脈にナイフをあてがって終了。アクビはナイフの太刀筋はおろか、首にナイフ特有の冷たさを感じるまで自分が何をされたかすら分からないだろう……。
しかし次の瞬間、サカキの眼前で予想外の出来事が起こった。
アクビの首筋めがけて突き出されたナイフはアクビの右手に握られ、そのナイフを突き出したヒイラギはアクビの左後方に一回転して、背中から地面に叩きつけられていた。
見ていたサカキも当のヒイラギですら、何が起こったのか分かっていない。
だが、相棒がコントのように一回転して無様にドスンと地面に叩きつけられる様を見せられたサカキの反応は早かった。
そのドスンの余韻も残らぬうちに、ジャケットの左懐に忍ばせて

あったＳ＆Ｗ　Ｍ３６　Ｌａｄｙ　Ｓｍｉｔｈを抜くと颯爽と身構えた。
銃口をピタリと照準に合わせると、ゆっくりと歩き出す。それは、ほんの少しもぶれる事はない。

２２

サカキには常日頃から面倒くさいと思うものが三つあった。
一つ目は禁煙ブームに伴う喫煙者への待遇　（タバコ税の増税による値上げや禁煙席の増加）
二つ目が走る、という事　（これは自分のスタイルに反する）
そして三つ目が、キレたヒイラギである。特に三つ目のそれは一番面倒くさい上に、一番　性質（タチ）が悪い。

サカキが身構えた銃の先には、ドスンの後、空を仰ぎながらブツブツ言っているヒイラギがいた。

アクビはヒイラギから取り上げたナイフを右手から左手、左手から右手と放りながら、仰向けのヒイラギから少し離れた所まで歩くと、ゆっくりとヒイラギの方へと向き直った。
ヒイラギとの距離は、先ほどと同じく約５ｍ。
「アクビ、逃げろ！」
後ろからサカキが声を上げた。アクビは次もかわせると思っているのかもしれないが、さっきのはヒイラギにとって四割程度のもの。キレた時のヒイラギの太刀筋を見極めるのはサカキにも無理だった。もし今のヒイラギをアクビの半径１ｍ以内に入れてしまえば、確実にアクビは殺されるだろう。ということは、サカキが止められるのもそれまでの間ということになる。
以前も一度だけ同じような状況に陥った事があった。その時、サカキはヒイラギを止める為にヒイラギの右太腿を撃ち抜いた。

事態の収拾の為とはいえ、相棒に撃たれたヒイラギに
「器官を損傷させることなく貫通できたのは、自分の超絶テクニックのおかげだ」
と励ましだか自慢だか良く分からない言葉を掛けたものだが、再びこうして超絶テクニックを披露するような羽目になるとは夢にも思っていなかった。サカキとヒイラギとの距離はまだ２０ｍ以上ある。
「早く逃げろ！」
サカキが再び声を掛けたが、アクビはナイフを放るのを止めただけだった。
アクビはナイフを右手でしっかりと持つと、ゆっくりと軽く振り上げるように構えた。それは、サカキでも一見して素人と分かる構えだった。
ヒイラギが上半身の反動を利用して勢い良く立ち上がる。
サカキはその動作で痛めたであろう腰に負担が掛かり、まともに立っていられないのでは、と期待したがそれはなかった。
ヒイラギはゆっくりと踵を返し、アクビと再び対峙すると左腕のリストバンドに隠しておいた折り畳み式のナイフを取り出し、刃を出した。まだ何かブツブツと言っている。
サカキはヒイラギが何本ナイフを隠し持っているのか分からなかったし、何をブツブツ言っているのかも分からなかったが、最後の一言は聞き取れた。
「……あがなえ！！」
ヒイラギが疾風のように駆け出す。
サカキは命中精度が上がるらしい魔法の言葉を呟くと撃鉄を起こす。
「メンドくせえ……」

鳥が獲物を狩るような低空飛行であっという間に距離を詰めたヒイラギが、徐々に体を起こしていく。アクビまでの距離あと五歩。
サカキはゆっくりと引き金に力を入れる。
だが、まさにその瞬間、アクビが持っていたナイフを放り捨てた。そのまま左右の手を高く上げる。
「降参です」
ヒイラギのナイフは、ギリギリ首の数ミリ手前でピタリと静止した。
ナイフが止まるのを確認すると、サカキは銃身を下げ撃鉄を戻した。
あと一歩ヒイラギがアクビに近づいてからナイフを捨てていれば、降参の甲斐なくアクビの首は割かれていただろう。そして、それを防ぐ為にサカキは迷わず引き金を引いていただろう。
「いや、スイマセン。冗談が過ぎました。私のは手品みたいなものですから、本気で来られたら手も足も出ません。あなた方の実力を見たいと思っての事でしたが、調子に乗りすぎたようです。」
アクビの謝罪は、いつもの感情のない口調と表情ではあったが、首筋を冷や汗が流れるのを見て、ヒイラギは刃を首から離した。
「お詫びの印と言ってはなんですが、今度自販機を見つけたら私にジュースの一本も奢らせてください……いや、良いんですよ、ほんの気持ちですから」
そんな事を言いながら、そそくさとアクビは車へ向かって歩き出した。ヒイラギの気持ちが変わらぬうちにと思ってか、その足取りは速かった。
「嵌められたな」
ニヤニヤしながら、サカキがヒイラギに近づいてきた。
「アイツ、お前の実力を測るだけじゃなく、俺の出方まで窺ってやがった。俺たち二人とも手玉に取られるとはね。大した狸だ」
ヒイラギの隣に立つサカキが、アクビの後ろ姿を見つめた。
「サカキ……」

ヒイラギがぼそりと言った。
サカキが名前を呼ばれて振り向いた。
「何だ？」
「……サカキ……腰が、痛い」
ヒイラギはサカキの肩に腕を回すと、体重を預けて寄りかかった。

## 23

散々な一日だ。
ただでさえサカキの安全運転で時間が掛かるというのに、アクビのせいで無駄な時間を過ごす羽目になった　（おまけに腰が痛い）。
そんなわけで、M市に着いた頃にはすっかり陽も暮れ、夜の七時になっていた。
今日は一日散々だったから、そろそろゆっくり休んでもいい頃だろう。
そう思っていた矢先に、アクビはせっかくなので今日中に藍沢の家族から情報を聞きたいと言い出した。
ヒイラギもサカキも慣れない仕事で疲労困ぱいだった為、アクビのバイタリティーには感心したものの、今日はもうこれ以上付き合いたいとは思っていない。
アクビが携帯でアポを取る間中、藍沢真人が今日は無理と断ってくれるのを祈り続けたが、すんなりとＯＫの返事が返ってきた。
散々な一日というのは、最後まで散々なものらしい。
ツキというのは一度落ち始めると、なかなか元には戻らない。

## 24

藍沢家の家屋はそれほど大きくはなかったが、一家四人が暮らすには十分すぎるシロモノだった。屋根などは水色で、藍沢真人のよ

うな中年には不似合いな気のする可愛らしさを感じさせた。
ヒイラギが特に引き付けられたのは、壁が真っ白なことだった。別段それは珍しいことでもなんでもないのだが、事務所のサカキいわくモノトーンの壁が自分たちの貧しい（心まで）生活の象徴のような気がしていたので、建物と言うと造りだの景色だのより、まず壁に目が行くようになっていた。
こんな夜分に見るからに如何わしい男たちがやってきたというのに、三人のうち二人は裸足で家に上がったというのに、家族は快く迎え入れてくれた。事前に藍沢正人が説明してくれていたという事もあるだろうが、足元まで見る余裕が無いほど切羽詰まっているのかもしれない。

応接間に通されると冷たい麦茶を出してもらえた。作りおきとはいえ、誰かが作った麦茶を飲むことなど何年ぶりだろうか。
如何わしい男達三人と、幸せを絵に描いていたはずの家族三人は応接間中央のガラスのテーブルを挟んで向かい合った。
藍沢真人が家族を紹介した。
「妻の清海（キヨミ）です」
藍沢氏の右隣の女性が「宜しくお願いします」と言って深く頭を下げた。年のころは四十代後半といったところだろうが、実際の年齢よりも若く見える。中年太りということも無く、痩せてはいたが、胸などの肉付きは良かった。年相応の皺など、ほとんど目立たなかったが、泣き暮れていたのだろう、目じりの皺だけは深かった。
やろうっちゃ、やれるな……。
ヒイラギは心の中で呟いた。
ヒイラギは女好きというわけではなかったが、来る者は拒まずといったところがある。年齢に関していえば、ストライクゾーンなど有って無いに等しい。
だが、問題はこっちじゃない……。
再び、心の中で呟いたヒイラギが、藍沢氏の左隣に座る女性の方

へ顔を向ける。
「こっちが、娘の真潮(マシオ)です」
親の贔屓目ではなく、藍沢真潮は本当に美しい娘だった。猫を想わせる瞳に少しだけ掛かったショートヘアが良く似合っていた。
問題はこっちだ……。
ヒイラギはチラリとサカキの表情を盗み見た。さっきまで一緒に疲れた顔をしていたくせに、サカキの目には光が灯っている。
ヒイラギは娘の顔を見た瞬間、この女にはサカキの数ある好みのうちのいくつかが該当されるという事にピンときた。
何度目の一目惚れだろう？　サカキときたら、惚れっぽくて仕方がない。

## 25

今度はこちらの番とばかりに、アクビがズボンのポケットから名刺入れを出すと、中の名刺を一枚ずつ向かい合う三人に手渡した。
「真人様にお話頂いていると思いますが、私、探偵のサトウと申します。この二人は、今名刺を切らしていますが、助手のヒサキとキリヤです」
名刺は偽物のくせに、本物の名刺よりしっかりとした物だった。佐藤太郎という名前と共に嘘であろうがしっかりとした住所と電話番号が記入してあった。
打ち合わせなどしているはずもなく、どっちがヒサキでどっちがキリヤか分からないサカキとヒイラギは「どうも」と曖昧な返事をした。
アクビが話を続ける。
「先日、真人様から大体の事情は伺いました。おそらく警察の方で従来通りの捜査をしていると思われますので、同じような捜査を私たちがしていっても埒が明かないと思われます。ですので、私たち

としましては警察が着目していないような事から情報を集めてですね、それから事件を深く掘り下げて調べていきたいと思っているんです」

疲れた表情の三人がアクビの言葉に頷く。

その三人を見ていると、今ならどんな要求でも素直に従うんじゃないかと思えてくる。

特に藍沢真人の頷き方ときたら、目の輝きと共に尋常ではなかった。まるで、プレイの最中に焦らされて、早く、早くとせがんでいるように見えておかしかった。

藍沢真人にしてみれば、危険な目に遭ってまでマチに行った挙句二千万円をギャングにいいように持って行かれたわけだから、自称探偵という怪しい男を紹介されたのも大人しく家に帰る口実を作られただけのような気になっていたはずだ。そんな中、本当に探偵が動いており、ましてや探偵がそれらしい事を言うものだから、その喜びたるやヒトシオだろう。

何一つ解決などしていないのだが……。

## 26

プライバシーに関わることなので、とアクビは応接間で一人ずつ話を聞きたいと伝え、家族はそれを了承した。

まず、藍沢真人が応接間に残り、他の二人は別の部屋で待機してもらったが、藍沢氏からの話は大体聞いていたし、彼の対人関係、商売上の競争相手等の捜査は警察もしているだろうという事で、藍沢氏との面談はものの五分で終了した。

彼が退室すると間もなく、彼の妻の清海が応接間に入ってきた。

清海によると、彼女の日常生活は主婦業の傍ら、スポーツジム通いと着物の着付け教室に出かける事くらいのものだった。

アクビは彼女から、ジムのインストラクター、着付け教室の先生、友人の名前と分かる範囲での住所や電話番号を聞き出すとメモした。
彼女から話を聞いた限り、藍沢氏から聞いた事以上に目新しい情報を得ることは無かった。
清海が部屋から出て行くと、サカキがジムのインストラクターと浮気でもしてるんじゃないか、とアクビに耳打ちしたが、アクビはさして気に留めるでもなく「どうですかね」と答えただけだった。

少しの間を置いて長女の真潮がやってきた。三人に向かいあってソファの真ん中に腰を下ろすと、サカキは今までとは打って変わって身を乗り出した。
アクビの質問が始まった。
「まず、自己紹介から始めてもらっていいですか？」
真潮が頷く。
「藍沢真潮です、もうすぐ二十歳になります。H大学の二年生です。サークルはテニスサークルに所属しています」
丁度良いソプラノは聴いている側にも心地が良い。
「三才年が離れているという事でしたが、姉弟仲はどうでしたか？」
「悪くは無いと思います。家族旅行はこの年になっても一緒に行ってましたし、父母の誕生日には必ず二人で買い物に行ったり……あと私の彼のことも慕ってくれています」
「彼」という単語に反応して、サカキの前のめりだった気持ちと上半身は、ゆっくりとソファの背もたれに深く沈んでいった。ソファの沈んでいく音にならぬ音はサカキの溜息を代弁しているようだった。
「その彼とはいつからのお付き合いですか？」
なぜ彼のことを、という疑問の色が美しい瞳の奥に浮かんだ。それをアクビは見逃さず、静かだが厳しい口調で真潮の疑問に答える。
「私たちは、警察の調べていない情報が欲しいんです。それはつまりあなた達ご家族のプライバシーの部分からの情報、それが重要な

んです。先に言わせてもらいますが、これから質問する事はあなたにとって答えにくいものだと思います。ですが、答えてもらわなければなりません」
アクビの真剣な態度に、真潮は覚悟を決めたかのように下唇を少し噛んで、真っ直ぐにアクビを見つめた。隣でぼさっと聞いていたサカキとヒイラギも、なぜだか姿勢を正した。
「彼の名前、年齢、職業、付き合ってどれくらいになるかを教えて下さい」
少し考える素振りを見せた後、真潮は「ちょっと、待っていて下さい」と言って応接間から出て行った。

## 27

正直、逃げ出したのかと思ったが、程なくして真潮は応接間に戻ってきた。
彼女は一枚の写真をガラスのテーブルの上に置いた。
今年の春に撮ったばかりだというその写真には、突き抜ける青空の下、まだ七部咲きといった観の桜の前で、満面の笑みを浮かべる三人が写っていた。
「真ん中の人がお付き合いしている伊東良太（イトウ リョウタ）さんです。高校の同級生で年は私と同じ十九歳。高三の秋から付き合い始めて一年半になります。付き合い始めの頃は、彼はカメラマンになるのが夢で専門学校の、私は大学の受験がお互いにあったので……その、ちゃんと付き合い始めたっていうか、デートとか出来るようになったのは、高校卒業してからです。彼は今、専門学校に通いながら、カメラマンになるっていう夢の為に頑張ってます」
写真中央の地味な男の右隣で寄り添うように真潮が、そして左隣では真尋が微笑んでいた。
写真を見る限りでは、真尋（マヒロ）が伊東を慕っていたのは本当のようだ。
「じゃあ、高校時代あなた達が付き合っていたというのは、あまり

知られていなかった？」
「はい、あまりと言うよりも、公には言ってなかったので誰も知らなかったと思いますけど……親友のサツキっていう子には教えてありましたけど、彼女言い触らしたりするような子ではないので」
その後、アクビは大学での生活等、他愛も無い質問をいくつかした。
さすがにヒイラギも何となく分かってきたが、こういう他愛も無い質問をアクビがし始めるという事は、自然な流れで訳の分からない質問をするという事らしい。そしてそれは、やはりやってきた。
「……ところで、真潮さん。あなたはお綺麗ですね。高校時代、伊東さん以外にお付き合いされていた方はいますか？　あと、告白された事も一度や二度じゃないですよね？」
さすがにこの質問には真潮だけでなく、サカキもヒイラギも固まった。
元彼や、振られた男の復讐。それも将に今更、の為に藍沢真尋が行方不明にならなければならないとしたら、それはナンセンス以外の何者でもない。
真潮は戸惑いながらも、アクビの真剣な表情に促され記憶を辿った。
「私、中学の時に始めて告白した人にひどい振られ方をされて、それがトラウマになったっていうか…その……伊東君が始めて付き合う人でした。伊東君と付き合うまでは、家族以外の男の人に、心のどこかで嫌悪感があって、告白されてもその人のどこがどうとかっていうわけではないんですけど、断っていました。高校時代に告白されたのは……三人です」
「その三人の名前と、分かる限りでいいので住所を教えて下さい」
「ええと、……一人は一つ先輩の西尾（ニシオ）さんで、高校卒業後は私と同じH大に通っています。あとの二人は同級生だった北川（キタガワ）君と南野（ミナミノ）君ですけど高校卒業後の進路は分かりません」
「実家の住所は卒業アルバムに載っていますよね。見せてもらって

いいですか？」
真潮はアルバムを取りに部屋を出て行った。
それを見送った後で、サカキはテーブルに残された写真を一瞥した。

――ああ、サカキ、分かるよ。

その写真の男は格好悪くないとはいえないまでも、とても藍沢真潮と釣り合いが取れているとは到底思えない。それでも、どんな魔法を使ったかは知らないが、彼女の残雪の様に積もり固まった嫌悪感を、春の日差しの様に溶かす事が出来た唯一の男なんだ。

人の幸せを斜から見たってしょうがないだろ……。

## 28

藍沢真潮の持ってきた卒業アルバムから、先ほどの二人の実家の住所と電話番号をメモしたアクビは、伊東と友人サツキの住所と電話番号も聞き出した。その時だけは「参考までに」という一言を付け足すのを忘れなかった。

事情聴取も一通り終えた三人は、家の中を軽く見て回った。
最後に藍沢真尋の部屋に向かう途中、家の電話が鳴り清海が少し話した後、真潮を電話口へと呼んだ。相手が誰なのかは、美しい娘の暗い表情に、うっすらと明るい色が灯るのを見れば一目瞭然だった。
アクビが誰にともなく、小声で呟く。
「わざわざ携帯ではなく家の電話に掛けてくるということは、両親共に公認であるということ。そして真潮以外の誰かが出ても、気遣う言葉を掛けてあげられるということ。ここまでの段階では、表面

上、彼は本当に良い人のようですね」
全てを疑っているような、トゲのある言い方だった。

藍沢真尋の部屋は十七歳という子供と大人の間を生きる男の部屋としては、極めて健全なものだった。
アクビはあれこれと一応見てまわっていたが、サカキはさっさとベッドの下からエロ本を引っ張り出すと、ベッドに腰掛けて読み始めた。
呆れたのか、収穫が無かったのかアクビが
「今日はこれくらいにしておきましょう」
さっさと部屋を出て行った。
サカキはもの惜しそうにエロ本をベッドの下に片付けた。

程なく、藍沢家を後にした三人は、味も素っ気も無い駅前のビジネスホテルへと向かった。
長い一日が終わる。

29

「ふざけろっての」

ヒイラギが誰に聞こえるでもなく呟いた。

時計はまだ、昼の十時を過ぎたところだ。夏らしくもないどんよりとした曇り空は、夜型人間に昼間を連想させるには乏しく、普段通りなら熟睡するのに丁度良い頃合だった。

車の助手席側のドアに寄りかかりながら、温くなったコーラを飲み干すと忌々しそうにその空き缶をゴミ箱へ向かって投げる。一投で決まったので煩わしいことが増えるのだけは免れた。

昨日の今日で体のあちこちが悲鳴を上げている。いや、痛みは昨日より酷かった。

何より、アクビのお詫びが本当に缶のコーラ一本だけだったのだから、無駄に味わう全身痛で滅入った心は更に荒んだ。

サカキはヒイラギが寄りかかるその車の運転席で、ハンドルに顔を埋めて寝入っていた。寝心地の悪さに、時々うなされる声が聞こえる。

ヒイラギは、大して吸いたくもないタバコに火を点けた。

きっちり朝の八時半にサカキとヒイラギは、アクビに叩き起こされた。

昨日、目一杯動き回ってアクビも同様に疲れているだろうに、すでに身支度は整えられていた。

一晩で疲れを綺麗さっぱり回復出来る身体の持ち主なのかもしれないが、目の下の隈が依然消えないところをみると、一晩中起きていたのかもしれない。

グズグズと準備を整え終わると、意識もはっきりしていないよう

なサカキの運転で車は出発した。
アクビの指示通りに車を走らせると、十分ほどで目的地のコンビニに着いた。H大は目と鼻の先にある。
「今朝、真潮さんに電話して確認を取ったところ、西尾さんが一限目の講義に出るとの事でした。講義が終わったら話を聞いてこようと思います」
道中で、アクビが素っ気無く言った。
サカキが「真潮さんに電話って家の電話？」と尋ねると「携帯です」という返事が返ってきた。
俺が見ていないところで、ちゃっかり携帯の番号まで聞き出すなんてコイツやるもんだ、とサカキは寝惚け眼で感心していた。
こうして、慣れない朝からの勤労に励む事となったサカキとヒイラギではあったが、コンビニの駐車場に車を停めたところで
「ここからは、私一人で行って来ますので」
そう言い残すとアクビはさっさと車を降りた。
呆気にとられた二人が気を取り直し「だったら、最初から一人で来いよ」とヒイラギが毒づく頃には、アクビの後ろ姿は正門の奥へと消えていった。

## ３０

ヒイラギがタバコの三分の一を吸い終えた頃、アクビが戻ってきた。
「お待たせしました」
ヒイラギは言葉を返すではなく、タバコを地面に落とすと足で揉み消した。
入れ違いに今、まさに起きたばかりのサカキがタバコに火を点けながら、運転席のドアを開ける。外へ出ると大きく伸びをしながら
「収穫あった？」と尋ねた。
「ええ、収穫ありです。ここにきてようやくツキが出てきました。

私、今朝の星座占い良かったんですよ」
相変わらずの無表情で本当に喜んでいるのかは分からないし、アクビが何座かということも教えてくれないので分からずじまいだったが、携帯電話を取り出すと今届いたばかりだというメールを見せてくれた。
「本当にツイています。北川と南野の住所分かったんですが、なんと二人とも隣の市に住んでいるらしいんですよ」
ホオズキからのメールには、北川と南野の住所と電話番号が記されてあった。
同窓会とかなんとかを口実に実家から聞き出したのだろうということは、サカキもヒイラギも容易に想像できた。

Ｉ県Ｈ市、ここからならサカキの安全運転の分を差し引いても、一時間程度で到着するはずである。

## ３１

Ｈ市までの道のりは、ひたすら国道を南下する。途中市内へと向かう為に、一度右折すれば良いだけなので楽なものだ。
国道の一本道ではサカキの安全運転も冴え渡り、次々と後続の車に追い越された。
出発して二十分、六台目の車に追い越された時、サカキが「……アクビ」と声を掛けた。ルームミラーをちらちらと確認している。
アクビは助手席から前方を見つめたまま呟く
「はい。付けられていますね……今朝、ホテルを出た辺りからウロチョロしていたのは気付いていたんですがね」
ヒイラギが後ろの窓から覗くと、黒塗りのセダンが付かず離れずの位置を走っていた。
「おそらく蛇咬会でしょう。私たちを探し当てるなんて、彼らにしては上出来ですね」

後ろを気にしながら、ヒイラギが疑問を口にする。
「昨日の倉庫の一件から足が付いたってのか？　バレないように顔まで隠したのに」
「マチの中で銃とナイフ使いのコンビなんて数が知れてますからね、目星を付ける事自体は簡単ですよ」

――だったら、覆面なんて被る必要あったのか？

アクビと話しているとヒイラギはイライラしてくる。だが、サカキは自分で言い出した蛇咬会犯行説が、再浮上してきたと思っているようで機嫌が良い。
「どうする？　とりあえず、ブッちめるか？」
鼻歌でも歌いだしそうなサカキの問いに、アクビは少し考えるような素振りを見せた後で答えた。
「このまま放っておいても問題ないとは思いますが、確かに目障りですね」
サカキはアクビの指示に従ってハザードランプを点滅させると、車を路肩に停めた。
黒のセダンも少し距離を置いたまま停車した。
サカキ達三人が車を降りて、セダンの様子を遠巻きに眺めるが、セダンには何の動きも見られない。
アクビが携帯電話を取り出し、電話を掛け始めた。
「……もしもし、私探偵のアクビと申しますが、一つ忠告したいことがありますのでカシスさんに代わって頂けますか？」

蛇咬会は二つの組織がくっついて出来た組織だ。当然、蛇の頭も二つある。
カシスはその頭の一つであり、もう一人の頭が武闘派であるのに対し、こちらはインテリタイプといった感じだ。

「カシスさんですか？　私、内容は明かせませんがネロファミリーから依頼されて捜査を進めている者です。捜査の進展にもよりますが、おそらく一週間程度で依頼主に結果を報告できると思います。これはあくまで忠告ですが、その結果如何ではあなた方も覚悟を決めておいた方が良いと思いますよ」

サカキもヒイラギも、アクビが蛇咬会の何を掴んでいるのか、今は知る由もなかったが、それは蛇咬会に対する宣戦布告と受け取った。

――ネロファミリーに報告されたくなければ、一週間以内に口を封じてみろ、と。

アクビはその後、一言二言話すと電話を切った。

サカキとヒイラギは互いの得物に手を掛けると、緊張感を保ちながらセダンの様子を伺っていたが、セダンはUターンして来た道を引き返していった。仲間を集めに戻ったのかもしれない。

――蛇咬会と事を構えてしまった以上、マチの外での流血もやむを得ない、か……。

## 32

H市内に入ると三人はとりあえず、腹ごしらえの為ファミレスへと向かった。

正午を過ぎ一番暑い時間帯だろうが、どんよりとした曇り空は相変わらずだ。今のところ蛇咬会の襲撃も特にない。

ファミレスはハンバーグメインの所だったが、チーズハンバーグセットにかけられていたのがデミソースだった為、サカキもご機嫌だ。

食後の一服にサカキとヒイラギがタバコに火を点けると、それに

応じるようにアクビもコーヒー味のキャンディーを咥えた。
　コロコロしながら今後の段取りについて説明を始める。
「これからは別行動になります。私は北川を担当しますので、お二人は南野をお願いします」
「一人で大丈夫か？」
　ヒイラギが心配して声を掛ける。勿論、アクビの体を心配してではなく、アクビにもしもの事があった際の報酬に対してだ。
「はい、一人で大丈夫です」
「……ああ、結構、強いもんな」
　サカキはそう言って、隣に座るヒイラギをニヤリと覗き込む。
　その目を見据えて、ヒイラギは別段楽しそうでもなく「ハハハハ」と声だけ笑って見せた。叩きつけられた腰とプライドが、ほんの少しだけ痛みを取り戻す。
「北川は専門学校生らしいのですが、学校はここから近いので私は歩いていきます。お二人は南野の勤め先を地図に書いておいたので、車で行ってください。終わったら、待ち合わせ場所はこのファミレスということで」
　手書きのメモを渡される。どうやら、南野は父親の工場で働いているらしい。
「それで、聞いてきて欲しい事なんですが――」

## 33

　サカキとヒイラギは、事務員らしい若作りの過ぎるおばちゃんに南野を呼んでもらうよう伝えると、おばちゃんがどちら様ですか、としつこく聞くものだから「〇×銀行のものです」と下手な嘘をつく羽目になった。
　サカキとヒイラギが工場の外で、町の定食屋「アタゴ食堂」のナ

ンバーワンメニューについて白熱した討論をしながら待っていると、
「やっぱり、餃子定食じゃね？」とサカキが答えたところに綺麗に陽に焼けた長身の青年が現れた。
甘い顔立ちは、学生時代にモテたであろう事を容易に連想させた。少なく見積もっても、伊東良太よりは格段に男前である。
マイベスト定食の事で一瞬、目的を忘れていたサカキがあっけらかんとして話しかける。
「君が南野君？　俺たち、実は銀行員でも何でもなくて、今、名刺切らしてんだけど……どっちかがヒサキで、どっちかがキリヤっていうらしい」
この目茶苦茶な自己紹介に、南野は明らかに引いていた。怪しい者を見るように一瞥すると、さっさと工場に戻ろうとする。
サカキがお構いなしに話を続けた。
「実は俺たち、今調べてる事があってさ。藍沢真潮って憶えてる？その子の弟が今、行方不明なんだよね」
藍沢真潮の名前に、南野の動きが止まり、振り返る。
「藍沢さんの弟が行方不明で、俺に一体何の関係があるんですか？」
その瞳には、疑いの色は浮かぶばかりだ。
「それで、君にどうしても聞きたいことがあって……」
さすがのサカキも一瞬、間が空いた。

――アクビのヤツ、何でこんな事聞く必要がある？

「……君が真潮さんに告白して、振られた時の事を聞きたいんだけど」
南野の表情が変わる。耳まで真っ赤にしてサカキを睨みつけた。
――当たり前だ。なんで見ず知らずの、それも素性も怪しい連中に自分の失恋話をしなきゃならない？
悪ふざけにも程がある。しかし、こんな質問をしてすんなり聞き

出してくるのだから、アクビはやっぱりすごいのかもしれない。
南野が唸るように、サカキに対して怒りを露にした。
「なんでそんな話しなきゃならねーんだ！！　それと藍沢の弟の行方不明と何の関係があるんだよ！　ざけんじゃねえ！！」
それはこっちも聞きたいところだ、と思いつつヒイラギが間に入る。
「あんた、結構モテそうじゃない。たかだか、数多い恋の一つだろ。そんなに怒んなって」
だが、モテモテの南野にしてみれば、それは数多い恋の一つではなく、唯一振られたという汚点だったらしい。火に油だ。
付き合っていられるかと、再び踵を返し、工場へ向かって歩き始めると「まあまあ」と宥めるサカキを突き飛ばす。
突き飛ばされたサカキは腰に両手を置いて「ふぅー」と溜息をひとつ、立ち去ろうとする南野の肩に手を掛け、後ろに力一杯引いた。
南野が尻餅を付く。
「てめえ、何しやがる！」
立ち上がろうとした南野のこめかみに、サカキがゆっくりと銃を突きつける。
「……え？」
南野が間抜けな声を出す。
サカキが面倒くさそうに吐き捨てる。
「あー、もう知らねーよ」
戸惑いながらも
「……本物？」
それだけ呟くと、南野の真っ赤だった顔色は土気色へと変貌していく。
サカキがゆっくりと撃鉄を起こす。
南野はなんだかんだと正論を持ち出しては、銃をおろしてくれるよう言っていたが、サカキは本当に面倒くさくなったようで
「アイハブア、ガーン」

と繰り返すだけだった。
ヒイラギは卒なく自分の役割をこなした。南野の脇にしゃがみこむと、分かりやすいほどの飴と鞭で「あんまり、怒らせんなって」と言って微笑んだ。
「あんた達、一体なんなんだよぉ」
半べそ状態の南野がしゃくり上げながら、ヒイラギに救いの眼差しを向けた。

それからは、すごく簡単だった。従順になってくれた好青年は、自分の失恋した日付までハッキリと憶えていた。
「……で、高三の春の四月二十一日の放課後、藍沢に教室に残ってもらって告白したんですけど、断られたんです」
ちなみに告白の言葉を聞いた際には、悪乗りしたサカキが語尾に「ニャンチ」と付けて話せと言ったらその通りにしたので、噴き出しそうになっているサカキにヒイラギが目配せして銃をおろさせた。
ガクガクと震える南野に、上から見下ろしながらサカキが思い出したように尋ねる。
「あんた、なんで振られたと思う？　自分の何が悪かったと思う？」
「そんなの分からないっスよ」
南野は大して考えるでもなく答えた。
そうなんだよな、振られる側ってのは、何が悪いのかなんて分からないものなんだよな、と自分の苦い経験と重ねてか、サカキは感慨深そうに頷いている。
一体、何がしたいんだこの男は、と呆れたようにしゃがんだままのヒイラギが頬杖をついてサカキを眺めていると、南野がまだ話を続けた。
「……ただ、振られた後……噂で聞いたんですけど、その時には藍沢、付き合ってるヤツがいたらしいです」
藍沢真潮は、伊東良太と付き合い始めたのは高三の秋と言っていたはずだ……風の噂は当てにならない、か。

南野はそれ以上の事は何も知らなかったが、アクビから聞いて来るよう言われた事は概ね聞けたので、サカキの下から無事開放された。
工場めがけて一目散に走り出した南野に、一言掛けるのをサカキは忘れなかった。
「あ、これ、オモチャだから」
逃げる背中がちらりと見た銃は、鈍く怪しく光っていた。

## 34

三人は昼食をとったファミレスで落ち合った。サカキとヒイラギが着いた頃には、すでにアクビはレモンティーをすすっていた。こうしてのんびりと過ごしているところを見ると危険な目には遭わなかったらしい。
南野に聞いた話をサカキが伝えると
「収穫ですね、ありがとうございます」
と無表情ながら、感謝の言葉を聞く事が出来た。
「実は私、二つの線を考えていたのですが、これで一つに絞ることが出来そうです。私、伊東良太共犯説も疑っていたんですよ。今までの情報からその線は消えたので、彼とは電話だけで済みそうです。伊東良太がどこに住んでいるか知ってます？　M県ですよ。行くのは億劫だなと思っていたんですよね」
無表情ながら、アクビの饒舌ぶりから機嫌の良さが感じられた。
携帯電話を取り出し、電話を掛けようとするアクビにサカキが口を出した。
「今言ってたもう一つの線っていう方に、蛇咬会が絡んでんのか？」
アクビが呆れたように答える。
「何を今更。蛇咬会はこの件には全く持って無関係ですよ」
サカキもヒイラギも目が点になった。
それでも何とかサカキが食い下がる。

「だったら、尾行してきたあの車は何だったんだ？　それにカシスに掛けたあの電話は、一週間経ったら蛇咬会を潰すって脅しだったんじゃないのか？」
アクビはどこから入ってきたのか、ハエを目で追いながら上の空で答える。
「尾行の車は、私たちが何を調べているのかを探っていただけですよ。それに、あの電話は一週間経ったら依頼主に調査結果を報告しますから、それまでに知られてまずいような物は処分しておいて下さいね、っていうただの忠告です」
サカキもヒイラギも完全に言葉を失った。それには構わずアクビは話を続ける。
「連中の農場にあった、コーヒーの粉が詰まった木箱を覚えていますか？　あれにはケチな盗品やあまり質の良くない薬が隠してあったんですよ。まあ、小遣い稼ぎ程度のものですがね。私としてもその程度の事をいちいちネロファミリーに報告するより、蛇咬会に一つ貸しを作っておいた方が、後々都合が良いですからね。おそらく今頃、売りさばいたり処分しているところでしょう」
アクビは一息に言い終えると、阿呆みたいに口をあんぐりと開けているサカキとヒイラギを交互に見た後
「では、私は電話しなければいけませんので」
と先刻から持て余されたように右手の上で待機していた携帯電話のボタンを押した。

## 35

「もしもし、伊東良太さんですか？　私サトウと申しますが……ああ、そうですか真潮さんから話を聞いている。それなら話が早い。伊東さんにはお聞きしたい事がいくつか有りまして……」
蚊帳の外のサカキとヒイラギは、チョコレートパフェとフルーツパフェをそれぞれ注文した。

「伊東さんが真尋くんに初めて会ったのはいつ頃ですか？　……高校を卒業してから、という事は去年の春頃ですか。では、真潮さんと付き合い始めたのはそれより前ですよね？　……高三の秋ですか。具体的な日にちは覚えていますか？　……十月の二十日ですね。分かりました」

アクビが素早くメモを取っていく。

「伊東さんはカメラマン志望だそうですね。やはり高校の頃は……そうですか写真部ですか。真尋くんは随分あなたを慕っていたとお聞ききしましたが、彼は何か欲しい物があると言っていませんでしたか？　例えば、あなたの影響で……そうですか、カメラを欲しがっていたんですか。私は全然カメラのことは分からないんですが、今、あなたがおっしゃったそのカメラ、お高いんでしょうね……へえ、そんなにする物なんですか。いや、参考になりました。今日はご挨拶がてら、と言う事でこの辺で。またお話を伺う事になると思いますので、その時は宜しくお願いします……そうだ。最期に一つだけお願いがあるのですが。伊東さんが高校時代に撮った写真って手元にありますか？　……アルバム五冊分？　それは凄い！　それをお借りしたいのですが……いえいえ、送って頂かなくて結構です。実は私の知り合いが、偶然あなたが住んでいる町に行っていまして、彼女に伊東さんの所まで取りに行ってもらいますので……では、また後で電話させて頂きます。ありがとうございました」

サカキとヒイラギは、顔は無表情のままなのに声だけは愛想良くできるアクビを感心して眺めていた。パフェは全然減っていない。

アクビは携帯のリダイヤルの欄から、ホオズキの名前を見つけるとボタンを押す。

「伊東良太の写真の回収、お願いします。アルバム五冊分です」

短く伝えると電話を切った。

何が、偶然知り合いが行っている、だ。アクビめ、事前に赤毛女を送り込んでいやがった。自分たちにはさっぱり情報をよこさないくせに、自分は裏で勝手に動いている、という事にサカキもヒイラ

ギもあまり好い気はしなかった。
携帯をしまうと、アクビがきっぱりと言った。
「これ以上、伊東良太から聞きだせることは何もありません」
ヒイラギがアクビの矛盾を指摘する。
「でも、さっきまた電話するって……」
「社交辞令です」
再び、アクビがきっぱりと言った。
アクビが伊東良太に電話する事は二度となかった。

## 36

三人は、一時間掛けてM市内へと戻った。藍沢真潮の親友である牧野さつきという女に会う為だ。
さつきはM市内で理・美容の専門学校に通っているらしい。実家から通えないこともないくせに、生意気にもアパートを借りて一人暮らしをしていた。
あらかじめアポを取っていたが、ドアを開けて出てきた女は三人に対してあからさまに疑いの目を向けた。まあ、それが正しい反応なのだろうが……。
さつきはスタイルの良い女だった。ヒイラギよりも背が高い。メイクのせいか、服装のせいか卒業アルバムで見たより、少し派手になった様に見えた。
部屋の中に入れてもらうと、気持ちばかりのコーヒーを出してもらえた。
「真潮の弟くんの事で、私が知ってる事なんてほとんどないと思うよ。弟くんとは最近、顔も合わせてなかったし」
真っ先に口を開いたのはさつきだった。普段なら話し合いの場でイニシアチブを取りたがるアクビが珍しく黙っている。そのせいで、間を持たせるためにサカキとヒイラギは、どうでも良い話をする羽目になった。

サカキとヒイラギが敬遠したコーヒーを飲み干すと、ようやくアクビが口を開いた。
「今日、さつきさんもご存知と思われる西尾さん、北川さん、南野さんに会って、お話を伺ってきました」
さつきの表情が一瞬曇る。
「この三人の共通点といえば、真潮さんの親友のあなたに説明するまでもないと思いますが、真潮さんに告白して振られているという事です。西尾さんは真潮さんが高二の三月、卒業式の日に、そして南野さんが高三の四月、北川さんが高三の七月……」
そこまで言うと、さつきの目をじっと見つめる。彼女はたまらず目を逸らした。
「北川さんと南野さんは、一度振られたからといって懲りるような人たちではありませんでした。しかしそんな二人に、やる気を削ぐような話が耳に入るのです。藍沢真潮には付き合っている男がどうやらいるらしい、と……それは西尾さんも知っていました。知っていればこそ、振られて元々のつもりで卒業式に告白したと教えてくれました。」
サカキもヒイラギも話の筋が全く見えないので、ただアクビの話に耳を傾けるのみだ。一体何のためにこんな話をしているのか？そもそも自分たちは藍沢真尋の捜索をしていたはずだ。それがいつの間にやら、姉の藍沢真潮について調べる羽目になっている。
微妙な空気が流れる中、アクビだけが饒舌に話を続けた。
「……という事は、少なくとも高二の冬から高三の夏に掛けて、真潮さんには伊東良太以外に付き合っていた男がいたという事になる。伊東さんが付き合い始めたのは高三の秋、それは本人に確認を取りました。……唯一、お話を聞いた三人の中で西尾さんだけが、その真潮さんの彼氏の事をもう少しだけ詳しく知っていましたよ。彼氏はどうやら大学生らしい、という事でした。」
アクビの次の一言を、場にいる皆が待ち受けた。
「……ところで、さつきさんあなた、西尾さんが大学生になってか

ら半年間、西尾さんとお付き合いされていましたよね」
　さつきの顔色が青ざめる。吐き出す言葉にも力がない。
「私が……私が西尾さんと付き合いたいから、根も葉もない噂話を流したとでも言うの？　……私は……私はただ……」
　瞳にたまった涙を拭うと、派手なメイクのせいで顔がぐしゃぐしゃになった。
「……私はただ、人から聞いた話を西尾さんに話しただけよ」
「そして、その噂話を親友の真潮さんに教えなかっただけです」
　そこから先は、アクビが引き受けた。
「ただ、西尾さんに話しただけ？　本当は幾許かの期待を持って話したはずですよ。だからこそ、真潮さんには話せなかったんでしょう？　後ろめたい気持ちがあったとはいえ、あなたはサックリ親友を裏切ったわけですね。焚き火をしていたら、山火事になったって話、知ってます？　結局、噂っていうのは人から人へと伝わるうちに、尾ひれを付けて勝手に転がっていく」
　饒舌になったアクビが、ただひたすらにさつきを追い詰める。まるで、さつきが親友を裏切って噂話を真潮に話さなかったから、こんな事件が起きてしまったと言わんばかりだ。
　サカキが言いすぎだ、と口を挟む余裕も無いほど、一息でアクビはとことんまで追い詰められるだけの言葉を言い終えた。
　正直、さつきが今回の藍沢真尋が消えた件と無関係なのは、サカキとヒイラギにも火を見るより明らかだった。しかし、アクビに隠したい傷を穿り出された女は、後悔と嫌悪の中で、床にしゃがみ込むと、小さく、小さく泣きじゃくった。

## 37

　さつきが泣き止んで落ち着きを取り戻すまで、三人は待った。
　その沈黙に耐えかねて、ヒイラギは外に出てタバコに火を点けたが、相棒のヘビースモーカーは深く腰を掛けた椅子から立ち上がる

事はなかった。自分のエゴの為に親友を裏切った女の事を思って、サカキはただ、じっと女の小さな背中を見つめていた。
ゆっくりとした時間が過ぎ、女の慟哭が治まるとサカキが大丈夫か、と声を掛けた。さつきはメイクがぐしゃぐしゃになって、何かの儀式みたいになった顔を隠すでもなく、サカキの方を見上げて子犬のように震えていた。
アクビがまるで自分の家のように、勝手にインスタントのコーヒーを新しく入れなおしてさつきの前に置くと、特に気を使うでもなく尋ねる。
「で、あなたは誰からその噂話を聞いたんですか？」
「……恵（ケイ）っていう子です」
さつきが素直に答える。メイクと一緒に緊張感も崩れたようだ。
「その人は実際に彼を見たんですか？　それとも、その人も別の誰かから聞いたんですか？」
「……恵は、その男の人を見たって言ってました」
「彼女は今、この町に？」
「M市内の実家にいるみたいです」
「それは助かりますね。さあ、顔を洗ってコーヒーを飲んだら、早速、恵さんの所に出掛けましょう」
アクビは、矢継ぎ早に質問を繰り出し満足のいく回答を得ると、さっさと出掛けようと席を立つ。
時刻は夕方になろうとしていた。外でカラスが鳴いている。
こいつの悪い癖が出たな、とヒイラギは思った。おまけに今度は泥まみれの子犬付きだ。
サカキがさつきを気遣って「今日はこの辺でお開きにしないか？」とアクビに声を掛けた。
それに答えるようにアクビが呟く。
「急がば回れと言いますが、散々回り道しましたから、ここらでそろそろ急がねば」

――噂の噂の出所を知りたければ、友達の友達に聞くといい。

３８

散々に急がされて、さつきのアパートから追い出されるようにして車へと乗り込んだというのに、アクビはしばらく車を走らせるとコンビニに寄るよう指示した。

得意の棒つきキャンディーでも切らしたか、と特に気にもせずコンビニの駐車場に車を停めたら、そこで三十分も待たされる羽目になった。

偶然というのは恐ろしいもので、ここは前にも待たされる羽目になったＨ大前のコンビニである。アクビに尋ねても、ただ待つようにと言うだけで、自分はさっさと店に入って雑誌を立ち読みし始めた。

仕方がないので、サカキとヒイラギも車を降りて外に出た。さつきにも声を掛けたが、車の中で待っていると言うので、サカキが温かいお茶を買ってあげた。

――さすが、男のたしなみ。

サカキとヒイラギはコンビニ一押しの商品であるソフトクリーム（バニラ味）を購入すると、店の入り口前で食べ始めた。なかなかに濃厚な味わいは二人を満足させた。

ヒイラギは美味いアイスを食べながら、タバコを吸うというのはいかに幸福な事か、という事を実演して見せたが、サカキには不評だった。

丁度そこへ、でかいバイクに跨った真っ赤なライダースーツを着込んだ女が現れた。

バイクを停め、ヘルメットを脱いで、かき上げたその髪もまた真っ赤だった。

アクビの相棒の、あのモデル並みのアンドロイドだ。
アクビがコンビニから出てきて、ホオズキから分厚い何冊かの本を受け取っている。おそらく、伊東のアルバムだろう。
その後、アクビが何か話し掛けると、ホオズキは何度か頷いていたが、彼らの話はサカキとヒイラギには聞こえなかった。
その様子を眺めていたヒイラギに、サカキが不意に尋ねた。
「……お前、どう思う？」
ヒイラギは不意な質問に即答できなかった。今までの事を整理してみたところで、考える事は全てアクビに任せていたので、この事件の概要は全然見えていなかった。当初は、まとまった金が入るかもしれないという事でモチベーションも上がり、自分のすべき仕事など色々と想像を巡らせたりもしたものだが、アクビが真尋ではなく真潮のことを積極的に調べ始めた辺りから、自分が何をしているのかさえ見失ってしまった。
返す言葉が見つからず
「お前はどう思うよ」
と聞き返す事しかできない。
「……んー、俺もまだハッキリとは分かんないけど……アクビの全身黒尽くめの下には、縄の痕やら鞭の痕がある様な気がするな。だから、アクビがMで、あの女がS……かな」

――何が……かな、だ。

ヒイラギが途方に暮れた様な顔でサカキを見つめる。
「お前、何の話してんだ」
「いや、だからさ、どっちがSで、どっちがMかという……」
「だから、どうしてそうなるんだよ」
サカキは困惑した表情を浮かべている。
「だってお前、蛇咬会の農場で見張りをブッちめた時、アクビが自分の車から縄持って出てきただろ。あれはいつ何時でもプレイ出来

るように常備してあるものだと俺は睨んだね。で、お前はどう思う？」
なぜか得意気なサカキの顔を見ていたら、自然と口から溜息混じりの言葉が漏れた。
「……どうでもいいよ」
ホオズキは再びでかいバイクに跨り何処かへ消えていった。

## 39

恵という女はM市内でフリーターをしていた。フリーターと言えば聞こえが良いが、単に親の脛を齧っているだけらしい。
さすがに実家に行くのは気が引けたので、さつきに電話してもらったら、余程ヒマだったのかすんなり待ち合わせのファミレスまでやってきた。
因みにそのファミレスはジョイパルだったので、サカキが少しだけ不満そうな顔をした。
恵は最初、素性の知れない男たちと一緒にいるさつきが、化粧らしい化粧もせず青ざめた顔でいるので、訝しがる表情を見せたが、すぐにそれは興味を隠せないという表情に変わっていた。何かしらの修羅場を期待しては楽しんでいる節があった。
そんなわけだから、藍沢真潮のことで聞きたい事があると伝えると、心底ガッカリした様子だ。そんなに仲良くなかったし、高校の頃の話なんて覚えてないと言って口を尖らせた。だが、聞きたいのは恵が発信もとの噂話の事だと分かるとペラペラと喋り出した。高校の頃の話は覚えていないと言っていたくせに、それとこれとは別物らしい。
「本当だって、私声掛けられたんだもん。放課後に校門の近くで、自分は藍沢真潮の恋人なんだけど、真潮はまだ学校にいますかってさあ」

アクビが質問する。
「その男、どんな感じでした？」
「背も高くて、顔もかなりイけてたよ。車も高そうなのに乗ってたし、着てる服もオシャレだった。Ｉ大に通ってるって言ってたよ。その頃のあたしには、もう大人の男って感じに見えたな。さすが藍沢、モテるなぁって嫉妬しまくり」
無邪気に笑う恵とは、対照的にさつきの表情は曇ったままだ。

恵の話によると初めて会ったのが、恵が高二の冬頃でその後も何度か見かけたり、話したことがあった、という事なので、その男はどうやら実在するらしい。
男は、大学生と高校生が付き合っているという事が、大学の友達に知られるとからかわれるので内緒にしているという。真潮もまた、恥ずかしがりやだから周囲の目を盗むような形で付き合うようになってしまった。だから、この事は秘密にしておいて欲しい。と言うので、恵は？さつきも含めて、たったの三人にしか？話さなかった。
「その男が写っている写真があれば、教えて欲しいのですが」
アクビが伊東から借りたアルバムをテーブルの上に置いた。
その分厚さと量に、恵はあからさまに嫌そうな顔をしたが、どうやらやってくれるらしい。恵にすれば、本当の話であるという証拠を見せたいのだろう。

アルバムには学校の中から、商店街で撮ったものまで、様々な写真があった。
恵がパラパラと調べ物をしている傍らで、サカキは恵が見終わったアルバムを何の気なしに開いて見た。そこには中庭だろうか、花壇の花を愛おしそうに優しい表情で見つめる藍沢真潮の姿があった。偶然、撮ってしまったものなのだろう、被写体はカメラに気づいていないらしい。
おそらく、二人が付き合う前のものだろうが、本人も気づいてい

ない彼女本来の表情を、伊東が偶然に撮ってしまったのだとしたら、運命の出会いっていうのは、偶然という名の必然なのかもしれない。

恵が最後のアルバムを閉じる音がした。

「写っていましたか？」

アクビの問いかけに恵が小さく首を振る。

「その人が写ってる写真はないな……でも」

恵が続ける。

「……その人の車が写ってるのはあったよ」

４０

M市に来て三日目の朝を迎えた。
質素なビジネスホテルとはいえ、アクビに叩き起こされることもなく、その日はサカキもヒイラギも十分に睡眠をとる事が出来た。
ヒイラギに声を掛けられたサカキが目を覚ましたのは、朝の十時を少し過ぎたところだった。

昨夜、恵が見つけた男の車が写っている写真は、ナンバープレートまでしっかりと確認できるものだった。
恵はご褒美にハンバーグとエビフライの洋食セットからドリンクとデザートまで、食べられるだけ食べると帰っていった。
さつきは最後まで水にすら口を付けようとはしなかった。別れ際、サカキが何を語るでもなく、さつきの伏せがちな瞳を少しだけ見つめる。
非難ではないその視線に応じるように、さつきは小さく頷いた。

その場で早速、アクビはホオズキに電話し、車の持ち主を調べるよう指示していたが、今朝になっても連絡はまだないらしい。
アクビは目覚めたサカキとヒイラギに
「待つのも仕事のうちです」
そう言い残し、自慢の愛車で何処かに行ってしまった。
サカキとヒイラギにしてみれば自分たちだけで何かを調べるという頭はないので、その日は一通り市内をぶらつくと、路地裏のカフェで昼間からビールを飲んだ。
アルコールが体の隅々まで行き渡ると、ほろ酔い気分で近くの公園まで歩き、芝の上に横になった。

心地よい風が眠気を誘う。

少しうつらうつらとしたつもりが　アクビからの電話で起こされると辺りは少し薄暗くなっていた。

場所を告げると十分と掛からず、アクビが迎えに来た。

サカキとヒイラギが乗り込むと、車は目的地目指して走り出す。

アクビの運転は荒かった。

## 41

車は十階建てのマンションの正面が見える路地の角に停まった。

ここで、ある男を見張るという。

隠し撮りらしくあまりハッキリとは写っていない男の写真と、名前がイナバという事だけアクビが教えてくれた。

三十分程待ってみたが、目当ての男が現れる気配はない。

日中、まともな食事をしていなかったという事もあるが、いつ男が帰ってくるかも分からないので、ヒイラギは買出しへと出掛けていった。

サカキとアクビ、二人だけの気まずい密室で

「良かったらどうぞ」

アクビが自前のキャンディーケースをサカキに向けた。

シルバーの縦長の箱にはキャンディーが三本入っていたが、一番右のミルク味を取ろうとしたら

「それは事件が解決した後、自分へのご褒美にとってあるのでダメです」

と言うので、真ん中のグレープ味をサカキは取った。

その後、しばらく続いた沈黙に耐えかねたサカキが、結局のところどういう事になっているのかアクビに説明を求める。

サカキにしてみれば、行方不明の藍沢真尋を探していたはずが、

いつしか藍沢真潮のストーカー　（らしい）探しをする羽目になり、そのストーカーにしても二年も経ってから復讐　（それも当人ではなく）するというのも、いまいち説得力に欠ける様な気がしていた。

ついでにいうなら隠し撮りでハッキリと写っていないとはいえ、写真の男は女には不自由しそうもない容姿の持ち主に見える。そんな男が、こんな誘拐事件に関わっているなどとは到底思えなかった。

アクビは質問に答える代わりに、自分の手帳をサカキに手渡した。それには所狭し、とアクビの殴り書きがしてあった。最初の方のページには藍沢真潮、１９８８、７、２４生Ｏ型、今までに聞いた事の他に、誰から聞いたのかスリーサイズまで書かれていた。そういったとても当人には聞けない情報は藍沢真人、妻の清海から牧野さつきに及ぶまでに至り、サカキは、本当にコイツは大丈夫か、コイツこそがストーカーなんじゃないか、と内心思った。

乱雑な殴り書きはほとんどが読めないものばかりで、結局サカキの疑問は何一つ解決されなかったわけだが、手帳の最後に書き込みされた？稲葉俊介？に大きな二重丸が括られていたので、アクビはこの男が重要な鍵を握っていると、間違いなく思っているらしい。サカキが手帳を閉じると、静けさと暗闇の中でアクビの声が小さく響いた。

「……サカキさん、私と組みませんか？」

## ４２

突然の事にサカキは何のことやら理解できずに戸惑った。

「実は以前からあなた達の事は聞いていまして、興味を持っていたんです」

暗闇の中で、アクビはサカキの顔を見るでもなく続ける。

「それで今回この仕事を引き受ける条件として、あなた達を助手に

付けてくれるようクロツチさんに頼んだんです……そして、申し訳ないですが、色々と試させてもらいました」
今回の件がクロツチの厚意によるものではなく、アクビの指名によるものだったと知って面食らったが、サカキは精一杯の余裕を取り繕った。
「農場の件も、ヒイラギとの決闘も俺たちを試す為のものだったってわけだ……で、どうだったよ？　俺たちの評価は」
サカキが薄ら笑いを浮かべる。が、本当のところは苦笑いだ。
「そうですね……正直、面白いと思いました。一見キレやすいサカキさんと、それを冷静に宥めるヒイラギさんという関係が成り立っているように見えますが、実際のところはキレたら手が付けられないのはヒイラギさんの方ですね。パーキングで私を殺そうとした時も、何のためらいも感じられませんでした。そしてサカキさん、あなたはというと、実のところ内面にとてもタフな冷静さをお持ちだ。それは例えるなら、炎は如何に大きさを変えようとも、静として揺らぐ事のない中心の青い火のようなものです」
それはアクビなりの褒め言葉らしいが、サカキはただじっとアクビを見つめていた。
「随分と調べさせてもらいました。サカキさん、あなたはマチでも五本の指に入るだろう銃の腕前らしいですね……だからこそ、質問させて下さい。どうして殺し屋やギャングにならずに何でも屋のような真似を？」
サカキは右手で銃の形を作ると、アクビのこめかみに人差し指を向けた。
「人を殺す事なんて簡単な事だ。相手の眉間を狙って引き金を引けばいい。それだけの事で食ってくってのも、つまんない話だろ」
サカキの余裕を根底から瓦解させるようにアクビは静かに、だがはっきりと告げた。
「そこに矛盾を感じるんですよ。だったら何故ヒイラギさんと一緒にいる必要があるんです？　人を殺す事を生業にしてこそ彼は活き

るタイプのような気がしますが……私には、いずれあなた達がお互いの生きる道を選ばなければなくなる時が来るような気がしてなりません」
　サカキがぼそりと言い返す。
「……そんな事、いちいち考えて生きちゃいねえよ」
「その時になって、お互いの間に二度と埋めることの出来ない溝が出来ても、そう言えますか？」
　サカキは何も答えられなかった。
「……私はかつて組んでいたパートナーに裏切られた事があります。とても良い関係を築いていたと自分では思っていました。しかし、パートナーは私を超えようとし、出し抜こうとした結果、ミスを犯した。それはある組織にとって多大な損害を被ることになり、パートナーは追われる身になりました。行き場を失い、最後に私に助けを求めてきた時……私はパートナーの喉を切り裂きました。望む、望まないに関わらず私の復讐は遂げられました」
　アクビが遠くを見つめる。
　束の間の後、サカキが呟く。
「それが、あの赤毛の女ってわけだ」
　アクビの細い目が、大きく見開く。上の空のサカキは初めてアクビが驚く顔を見た。
「……サカキさん、あなたは私が思っていた以上に素晴らしい」
　アクビにしてみればただの例え話だった。いかに息が合っていると思っている人間同士でも生き方が違えば、知らぬ間に溝が出来るものだと伝えたかっただけだ。確かに殺したとは言っていない、だが「かつて組んでいたパートナー」と濁した人物がホオズキのことであると当てて見せたのは、サカキがアクビの話の中に微かに現れたホオズキへの心情を読み取ったからに他ならない。
　サカキは無言のまま、あの無愛想で無口な、赤毛の女の事を少し想った。
　アクビは満足気な様子のまま、話を続けた。

「私はホオズキの他にもう一人、パートナーが欲しいと考えているところなんですがサカキさん、私はぜひあなたと組みたい。あなたがいなければヒイラギさんは組織に入るなり、殺し屋になるなりするでしょう。しかし、それがヒイラギさんにとっては一番自然な姿ではないでしょうか？」

サカキは何も答えない。

「私が欲しいのは殺し屋ではなく、あなたのような有能なパートナーです。考えて見てはくれませんか？」

サカキはやはり何も答えない。

小さなミニクーパーを基点に、辺りを沈黙が霧となって包んでいった。

## 43

ヒイラギが車に戻ると車内は罰ゲームのように静まり返っている。一瞬、息すらしてはいけないような気がして、ヒイラギは水の張った洗面器に顔をつけるように、車に乗る直前に大きく息を吸い込みそうになった。

アクビはともかく、サカキまで話しかけても押し黙っているので、ヒイラギも大人しくしている事にした。

しばらくして、マンションの前に真っ赤なスポーツカーが停まり、車中からブランド物のスーツを着こなした二人の男女が出てきた。

マンションの入り口前で、男より若干年上に見える女が、高いヒールを更に爪先立ちにして長身の男にキスをする。女が車に戻ると、窓越しに男は小さく手を振った。端正な顔立ちに浮かべた少しだけ困ったような微笑は、別れ際のものとしては最高の出来だった。

走り出した車が角を曲がって見えなくなるまで見送った後、懐から出したカードをカードキーに通すと正面玄関の自動ドアが開いた。マンションの中へと消えていったその男は、間違いなく写真の男で

あった。
「稲葉俊介（イナバシュンスケ）がここに住んでいるのは間違いないようです。顔は覚えましたか？」
ヒイラギが「ああ」と答え、サカキが小さく頷く。
「そうですか。では、マチに帰りましょう」
ヒイラギが「は？」と聞き返すより早く、アクビは車を発進させた。

アクビの運転は荒いが速い。おそらく、サカキの運転の半分でマチに着くだろう。
走り始めてしばらく経ってもサカキは相変わらず無言のままだ。
最初のうちこそ、なんでこのタイミングでマチに帰らなければいけないのか等と聞いてはみたものの、アクビは準備しなければならない事があるの一点張りなので、ヒイラギも喋るのを止めた。
そんなわけで帰りの車中は終始静かなものだったが、道の中ごろで一度だけアクビが誰に聞こえるでもなく呟いた。
「あの男、さっきの女性の他にも付き合っている女性が二人もいるらしいですよ。いやぁ勇気のある方だ」
何をして勇気と呼ぶのだろうか？　たしなみの定義ならばお手の物なのだが、とヒイラギは助手席に座るサカキを後ろから覗いてみたが、やはりサカキは無言のままだった。

## ４４

連絡があるまで待てと言われたが、一週間経ってもアクビからの連絡はなかった。
マチに戻ってからのサカキはいつも通りのサカキに戻り、彼の無意味な質問と無茶苦茶な理屈に付き合わされては、何度もヒイラギは痛い目にあった。
それは、例えばＮＨＫの受信料の事だったり、海外に旅行に行く

際の税金や飛行機の料金が高い事への不満だったりするわけだが、事務所にはテレビなど無いし、自分たちがパスポートを取れる事もまず無いだろう。それでもどこかから聞いてきてはヒイラギに知っているか尋ね、そこから半ばキレ気味に無茶苦茶な理屈をつけ始めるそれらはヒイラギにしてみればほとんどがどうでも良い事だったし、勿論ヒイラギのせいでもなかった。

ちなみに、海外云々の話をしてしばらくの間は、自分の流行語なのか事あるごとに「円強ぇー」と言っていた。

アクビから連絡があったのは、結局それから更に十日経ってからのことだった。

本日の昼食は数ある好物のひとつ、大盛りの縮れ細麺が抜群にスープに絡む中華そばを町の名店「タラフク」でとサカキは決めていたらしく、アクビからの電話を受けたヒイラギに「居留守を使え」と最初の内こそ無茶な注文をつけていたが、観念した様子でグズグズしながらも支度を済ませた。

正午だというのに今日もまた晴れ間は見えない。

それでもアクビの待つ東のマンションへの通り道、雑草の中で健気にも向日葵が咲いていた。

アクビはマンションの入り口で、愛車のエンジンを掛けたまま車の脇に立っていた。

「準備に少し手間取ってしまいました。遅くなってスイマセン」

運転席のドアを開け、乗ってくださいと手のひらを向ける。早速、出発しましょうという事らしい。

遅くなったなどと言っていたくせに、サカキに運転を任せ、時々鼻歌を歌ったりしていたので、まるでピクニックにでも出かけるようだ。

機嫌は良さそうだが、やはりこちらの質問には答えてくれない。唯一分かった事といえば、アクビの鼻歌が「雨に歌えば」という事

ぐらいのものだった。

＊

M市内に入る頃には、随分陽も落ちてきた。
通り過ぎる街並には子供たちの姿が多く見られる。学生たちは夏休みに入ったらしい。
アクビの指示で、街の角の大きな立体駐車場へと入った。そのまま上っていくと三階の角に停めてある中型程度のトラックの前に、藍沢真人が立っていた。この前会った時より、さらにやつれて見える。
ミニがトラックの隣に停車すると、アクビは外に出て一応形式的な挨拶を済ませたが「詳しい話は、いずれ」と言って、やはり多くは語らなかった。
しかし、今回は最後に一言「満足していただけると思いますよ」と付け加えた。

## 45

アクビが準備を終えて、トラックを発進させる頃にはすっかり陽も落ち、薄暗くなっていた。
トラックには街中でよく見かけるペンギンのキャラクターが描かれたステッカーが貼られ、アクビと藍沢真人は揃いの作業着を着ていた。サカキとヒイラギは狭い荷台に押し込まれて窮屈な思いはしたが、トラックはそれほど走ることなく停車した。
荷台の扉が開かれると目の前には稲葉俊介のマンションがあった。
アクビはせっかく窮屈な荷台から開放されたサカキとヒイラギに、今度は荷台の中にある二台のカートの上に乗っている段ボール箱にそれぞれ入るよう指示した。正直、面倒くさかったが、ここで話を長引かせるとますます面倒くさい事になりそうだったので、サカキ

とヒイラギはおずおずと段ボール箱に入った。段ボール箱は閉められ、開かないようにきっちりとガムテープで留められた。
アクビと真人がそれぞれのカートを押して玄関前に向かう。
ダンボール箱の中は暗く、カートの揺れはひどいので乗り心地は最悪だったが、ダンボール箱の持ち手の部分に穴が開いていたので、何となく外の様子を伺う事は出来た。
玄関前までカートを運ぶと、アクビはカードキーが設置されている方へと向かう。
マチの中とは勝手が違う、簡単にカードの複製など出来ないだろう。
しかし、アクビはカードキーの前に立つも、その隣に備え付けてあるインターフォンのボタンを三つほど押した。
「皆方（ミナカタ）さん、皆方　唯（ユイ）さんですか？　ペンギン宅急便のものですが」
――皆方？　……誰だ？
程なく、正面玄関のロックの外れる音がした。
正面ホールのエレベーターで目的の階まで昇った後、カートはどんどん進んで行き、４０７号室　皆方の表札の貼られた部屋の前で停まった。
アクビが表札の下に取り付けてある呼び出しのベルを二度押すとドアが開き、中から茶色いカツラを被ったホオズキが現れた。

## ４６

４０７号室でダンボール箱から開放されたサカキとヒイラギ、そして藍沢真人にアクビが手早く説明を始めた。
「この部屋の住人、皆方唯には三泊四日のハワイ旅行に出かけてもらい、そして帰国後にホオズキと入れ替わってもらいました。当の

本人は今頃、温泉にでも浸かっているんじゃないですかね」
アクビがごそごそと、手に取った長方形の箱を覆うビニール袋を破りながら話を続ける。
「そして、私と真人さんが宅配会社の役で、サカキさんとヒイラギさんがハワイで発送した衣類やお土産の役です。本当の衣類やお土産は事前に、ホオズキに小分けにして持ってきてもらいましたから、問題無しです」
長方形の箱から取り出したマカダミアナッツチョコを、口に放り入れる。
「私としては、こんな面倒くさい事はしたくなかったんですけど、一応、玄関ホールに監視カメラが設置されていたものですからね」
サカキが質問を口にする。
「その入れ替わった女って大丈夫なのか？」
「いやあ、今回一番手の掛かったのがそこでして、結構大きなマンションですから、一人くらいは借金のある人間がいるとは思っていたんですが、なかなか説得に骨が折れました。でも、部屋を二日貸してくれるだけでハワイ旅行と温泉旅行、それに借金まで返せるんだから良いバイトだと思いませんか？　でもまあ、パスポートを持っていたってところはラッキーでしたね」
サカキが口を挟む。
「いや、そうじゃなくて、その女がタレこんだりしないかってことだよ」
「彼女は部屋を貸したというだけで、何が起きているかなんて知らないんですよ。部屋を貸したという事にしたって、自分の借金を返す為です。おまけに現在、無職ですしね。負い目のある人間が、自分からわざわざ喋るって事はないでしょうが、もしもの時は……」
そこで一つ区切り小さな溜息をつくと、あっさり言った。
「……他人にすんなり自分のマンションのカードを渡すような、油断だらけの女なんてどうとでもなるでしょう……そんな話は置いておいて、今日を無事乗り切り、明日ホオズキがその女と入れ替われ

ば、この件は一件落着ですよ」
　そう言って口元を緩めるアクビを見ていると、わざと油断だらけの女を物色し、借金を作らせるよう仕向けたのもコイツなのでは、とさえ思えてくる。
　ちなみに、無職云々に関していえばサカキもヒイラギも似たようなものなので、無職イコール負い目にはならないんじゃないか、と思ったが口にはしなかった。
　話に全くついて行けず、呆然としている真人にアクビが声を掛ける。
「真尋さんが行方不明になった事について、４１２号室に住んでいる稲葉俊介という男が何か知っていると、私は考えているんです」
　こんなまどろっこしい方法まで使ってマンションに潜り込んだのだ。何か知っているどころではない、全て知っているとアクビは思っているはずだ。
「稲葉は私の予想通り、今日会社を休みました。おそらく、明日も休むはずです。ところで真人さん、明日が何の日か、勿論ご存知ですよね」
　真人が呟く。
「明日は……真潮（マシオ）の誕生日だ」

## ４７

　ホオズキを部屋に残して、四人は４１２号室の前に立っていた。
　アクビの確信はさておき、そこまで来てもサカキとヒイラギには、同じＭ市内の藍沢宅からそれほど遠くもないこのマンションに藍沢（アイザワ）真尋（マヒロ）失踪の手掛かりがあるという実感はいまいちなかった。
　各部屋のドアは暗証番号の数字を備え付けの装置に打ち込む事によって開錠する仕組みになっている。アクビがポケットから白い粉の入った小瓶を取り出すと、装置のテンキーに振りかけていく。

「稲葉が部屋を開けた時に、前もってホオズキに指紋を拭き取っておいてもらったんですがね。今は何でも便利になりましたよね、欲しい物を手に入れるのも。指紋をとるのも」
アクビが息を吹きかけて、テンキーの上に掛かった粉を払うと、テンキーの上の四ヶ所だけ指紋の跡が残る。
０・２・４・７
一瞬、サカキが奥歯に物が挟まったような顔をしたが、すぐに真人が答えを出した。
「７月２４日、真潮の誕生日」
それは、まさにこれから四時間後に訪れようとしている日付だった。
その瞬間、アクビ以外の三人にも確信が沸いた。

――この男は確実に今回の件に関係している。

真人が何か喚きながらボタンを押そうとしたところを、後ろからアクビが右手と口を押さえ羽交い絞めにする。素早くサカキとヒイラギの顔を交互に見ると、声を発した。
「お願いします」
サカキがボタンを押しドアを開ける。
中に飛び込んだヒイラギの右手にはすでにナイフが握られている。サカキもすぐ後に続いた。
その後ろを、アクビの手を振りほどいた真人が転がるように駆けてきた。
一つ目の部屋を抜け、二つ目の部屋のドアを開けたところで、中へ侵入した男たちは順番に立ち止まっていった。

その部屋には、ガッシリとした作りの鉄の電気スタンドにぼんやりと照らされて、上半身裸で突っ立っている稲葉俊介がいた。
その傍らには

部屋の床に散乱する玩具／鞭／蝋燭／浣腸器／そして――天井から吊るされた藍沢　真潮（マシオ）。
高校時代のセーラー服を着た少女は、全身を締め付ける縄に弄ばれるように宙で微かに揺れていた。虚ろな瞳のままで。

一瞬、気を取られはしたものの、稲葉は小さなテーブルの上に素早く右手を走らせると、玩具と共に置いてあったナイフに、手にしたバイブから持ち替える。そして、吊るされて身動きできない真潮の首筋にあてがった。だが、その真潮も以前会った時と何かが違っている。
ヒイラギもそれには気がついた。
以前見たときより髪が短い。
絶望にも似た表情で、真人が力なく呟いた。

「……真尋（マヒロ）」

## 48

稲葉は「何だ、お前ら！」だの「部屋から出て行け！」だのと騒いでいた。
この変態がプレイに熱中できる程だから、防音設備はしっかりしているのだろうな、と冷静に部屋を見渡した後、ヒイラギはゆっくりと動き始めた。
小さく両手を挙げると、右手のナイフを床に静かに置く。
「まず、落ち着いてさ。話し合おうよ」
当然、稲葉は話し合うつもりなど毛頭ない。
「うるせえ！　他に何か持ってないか！」
ヒイラギがゆっくりと体をずらすように、右斜め前に一歩だけ出る。稲葉からサカキの右半身が少しだけ死角になる。
「さっすが！　よく分かってらっしゃる。実はリストバンドにも仕

込んでたんスよ」
　左手のリストバンドに隠しておいたナイフを取り出すと、稲葉に見えるように軽く持ち上げる。サカキは全身微動だにせず、ただ、右手だけがゆっくりと懐にしまってある銃を抜き出していた。

　ヒイラギがナイフを稲葉の床の方に向かって、軽く放り捨てる。ナイフが床に落ちる音と同時にヒイラギの後方から？パン？という乾いた音が響く。

　サカキの放った弾丸は、部屋の右中央にある鉄のスタンドの支えの部分で鈍い音を反響させると跳ね返り、稲葉の右手に握られたナイフを人差し指ごと弾き飛ばして左奥の壁にめり込んだ。
　稲葉には何が起こったか理解する隙も、痛みを感じる隙もなかった。ただ、気がついた時には眼前の男が、さっき捨てたはずのナイフを自分の首筋にあてがっていた。
　そのままの状態で、ヒイラギが後方のサカキに振り返るでもなく声をかける。
「サカキぃ、わざわざ兆弾狙う必要ないだろ、今のは！」
　リスクを冒さず普通に狙えたであろう、そんなヒイラギの苦言はサカキに通じない。
「ヒイラギぃ、知ってんだろ？　俺は、決める時は決める男だ……」
　サカキは銃口から出る硝煙をわざとらしく吹き消した

## ４９

　ヒイラギが稲葉を押さえた事を確認してから、部屋にのこのこ入ってきたアクビだったが、部屋に入ってきてからの行動は速かった。
　藍沢真尋が吊るされている縄を手際よく解くと、何か掛けてあげるものを、と部屋中見渡したが、部屋には体操服やスクール水着の類しか見当たらなかった。物欲しそうな顔でサカキを見つめると、

サカキは着ていたジャケットをセーラー服姿の真尋に掛けてやった。
そこへ真人が駆け寄り、息子を抱きしめて泣いた。
虚ろな瞳の真尋も、そこで初めて声を上げて泣いた。
見ると、人差し指が根元から無くなった右手を見つめて、稲葉も口をパクパクと動かしながら泣いていた。
アクビは、ヒイラギが身動き出来ないようナイフを付き付けたまま血だらけの稲葉の前に歩いていくと、転がっていた蝋燭に火を点け、いきなり稲葉の右手人差し指があった根元を火で炙った。稲葉の悲鳴と肉の焦げる匂いが辺りを包む。そして、悲鳴を上げている稲葉の右手人差し指の根元に、そのまま溶けた蝋燭を突っ込んで荒々しい止血を完了させた。
蝋燭を突っ込んだ瞬間、稲葉が小さくギャッと言ってへたり込んだ為、ヒイラギは危うく頚動脈を切り裂くところだった。稲葉はそのまま、涎を垂らしながらビクッビクッと動いている。
次にアクビは、懐からサカキの物と同じ形の銃を取り出し、弾を一つ抜くとへたり込む稲葉の左手に握らせた後、床に投げ捨てた。それはサカキの物と同じ形ではあったが、昨日今日までマチのチンピラが使っていたような安っぽさが滲んでいた。
アクビが早口で喋りたてる。
「稲葉俊介は人生に失望し、薬を使用した上で銃による自殺を図りましたが失敗し、その後、自分の車で失踪したことにします」
サカキに向かって、どこかから見つけてきた車の鍵とマンションのカードキーを放り投げた。
「ジャンキーには見えないけど」
稲葉の顔を見つめながら、サカキがのんびりと言った。内心、乱暴な話だな、と思っているに違いない。
アクビはポケットから取り出した注射器を足元でグチャグチャに踏みつけると、白い粉の入ったビニール袋を取り出し、袋を破っては辺りに白い粉を撒き散らした。
「人は見かけによらないものです。ちなみにこれは前回農場に忍び

込んだ時に蛇咬会から拝借しておきました」
事もなげに言ってのける。
「さて、宅配会社の人間としては、中身を取り出した後、ダンボールを持ち帰るよう言われたという設定としては時間ギリギリです。さっさと出ましょう」
アクビは、全員を部屋の外へと追い立てた。

## ５０

「もう少しの辛抱だからな」
真人が、カートのダンボール箱の中で体を丸めている真尋と、自分に言い聞かせるように声を掛ける。　落とさないように慎重に、それでいて出来るだけ素早くマンションの外に連れ出す、という強い意志が伝わってくるようだ。

とりあえず、警察には通報しない、というのはアクビの指示だった。
マチの人間が関わっているから、当たり前といえば当たり前なのだが、それ以上にアクビにすれば、法律ギリギリで……違反している事だらけなのだろう。
アクビはドア脇のテンキーを一度拭き取ると、拾ってきた稲葉の人差し指で、ハンコを押すように四つの数字を一つにつき何度も押した後、施錠した。
ヒイラギに抱えられたままぐったりしている稲葉のズボンのポケットに、もはや使い道のない人差し指をしまう。
「車は地下の駐車場にあります。詳しくは彼に聞いて下さい」
それだけ言うと、ペンギンマークの宅配会社の男たちはさっさと行ってしまった。
さすがに上半身裸というわけにもいかず、稲葉はＴシャツを一枚着せられていた。寒くもないだろうに、駐車場へと向かう間ずっと

震えている。
ずさんな事に、このマンションは、正面玄関とエレベーターにしか監視カメラが設置されていなかった。
非常階段を降り、駐車場の入り口にあるカードキーに稲葉のカードを通すと、車の出入り口のシャッターが、ゴゴゴ……とゆっくり上がっていった。
最初、写真に写っていたスポーツカーに乗れると張り切っていたサカキだったが、稲葉はでかい４ＷＤ車へと車を替えていた。
前の車の方が良かったとサカキが何度も小突くから、稲葉はびいびいと泣いた。そのくせ、いざ車に乗ろうとしたら逃げようとしたのでサカキが殴って気絶させた。
４ＷＤ車はスムーズに発進し、アクビたちとの待ち合わせ場所のマンションを目指す。
この４ＷＤ車の方が、アクビ達のトラックよりもスピードが出そうだが、サカキの運転ではアクビ達は大分待たされる事になるだろう。

サカキがタバコに火を点ける。それを見てヒイラギもタバコに火を点けた。

## ５１

アクビのマンションの二階の一部屋で、猿轡を噛まされた稲葉が中央の椅子に縛り付けられて座っていた。
その周りを男たちが取り囲むように立っている。その輪の中には、クロツチの姿もあった。
クロツチが、サカキとヒイラギをチラリと見た後
「こいつら、役に立ちましたか？」
とアクビに尋ねると
「ええ、とても助かりました」

と返事をしていたので、報酬の取りっぱぐれはないようだ。
真尋は、三階にあるアクビの事務所で休んでいる。一通りの儀礼的な挨拶が済んだところで、業を煮やしてサカキが説明を求めた。
「で、結局どういうことなんだ？」
アクビがもったいぶる様に話し出した。
「とても簡単な話だったんです。美しい姉弟がいて、ある日突然、弟が行方不明になった……ね、簡単でしょ」
サカキもヒイラギも、アクビが何を言っているのかさっぱり分からなかった。
「私はまず、警察が調べても何も手掛かりがなかった事、そして蛇咬会が何の情報も掴んでいないという事から、真尋くんが誘拐されたとするなら単独犯だと睨みました」
男たちは、ただアクビの話に耳を傾ける。
「もし、犯人が単独犯だとすれば、なぜ真尋くんを誘拐したのかという事が疑問になります。誘拐するなら、女性の真潮さんにした方が断然リスクが小さいのに……と、いう事は、犯人は真潮さんを誘拐できない何らかの事情があったという事になる。この点から私は、真尋さんではなく真潮さんの身辺について調べた方が近道だと考えました。そして、調べていくうちにこの男にたどり着いた」
アクビが稲葉へ視線を向けた。
「真尋くんは高価なカメラを欲しがっていました。そんな時に偶然を装って近づいた。そして、収入の良いバイトを紹介する。おそらく、自分は新人ながらプロのカメラマンで、助手兼モデルを探しているとでも言ったのでしょう。後は親密になった頃合をみて拉致すれば良いだけ。口止めもされていたでしょうが、割が良いとはいえモデルなんかしているとは恥ずかしくて言えない。以前のバイト先を辞めた事を誰にも言っていなかったのは、そのためです」
だが、金目的ではないとしたら、一体動機は何なのか。アクビが場の空気を察して、続ける。
「サカキさん達は調べていく過程で、藍沢真潮への復讐だとしたら、

なぜ二年も経ってから、と考えていたようですね。二年間、ポイントは正にそこです。なぜ二年も経ってから、ではなくて稲葉はわざわざ二年待ったんですよ。藍沢真尋が十七歳になるのを」
サカキがタバコに火を点ける。辺りを煙の匂いがふわりと包む。

## 52

「稲葉は十七歳の藍沢真潮に恋をした。ところが、その真潮はひょっこり現れた伊東という男と恋に落ちた。稲葉という勝手な男にしてみれば、それは裏切り行為に映ったんでしょうね。何にせよ、彼は一人で勝手に失恋したわけです。だから、十七歳になる藍沢真尋を真潮に見立てて、もう一度十七歳の真潮と恋をやり直そうと考えた。まあ、今回はきちんと調教して、自分を裏切らない真潮を創りあげた上で、ですがね」
「だが、真潮と真尋じゃ……」
藍沢真人の口から出た当然の質問は言いよどみ、そして消え入った。
……性別が違う。
真人の言いたい事をその場にいる他の四人は理解する。そして四人はマチ特有の概念で当然の如く回答を導きだした。
……だからそれがどうした。

マチに暮らす人間にとって、そのほとんどが名前などアイデンティティーに貼り付けられた見分け用のラベルに過ぎない。
サカキもヒイラギも偽名だが、サカキがサカキで在りうるのは、サカキがサカキたればこそなのだ。
明日サカキが死んだとして、他の誰かがサカキを名乗ってもそいつがサカキたればこそこのマチではそいつがサカキになる。そこには銃使いも、ナイフ使いも、年齢も、ましてや性別なんて関係ない。
藍沢真尋が稲葉俊介にとって藍沢真潮であったのなら、稲葉の支

配するあの限定された空間（プライベートルーム）では真尋は真潮だったのだろう。

「……まあそうですね」

真人の質問に曖昧な回答と笑顔を向けるアクビに、ヒイラギが口を挟む。

「でもさ、いくら藍沢真尋を真潮に見立てたって、自分はその時の年齢じゃないだろ」

「確かに。でも、自分が年をとったなんて思うのは気の持ちようです。鏡さえ見なければ、自分の中では時を止められる。稲葉は今回失敗したとしても、真潮さんに子供が出来たら、その子供を誘拐して同じ事をしたと思いますよ。その方法でいけば、何度でも十七歳の藍沢真潮と恋が出来ますね」

「自分が老いさらばえたジジイになってもか？　馬鹿げてる」

サカキが吐き捨てるように言った。

「そうでしょうか？　あの時に戻れたらと思ったり、理想の生まれ変わりや不老不死を願う事は人類という種においては特別変わった事ではないと思いますよ。彼は、それを彼なりに実践したまでですよ」

そこまで饒舌に語っていたアクビだったが、藍沢真人の顔を視界に見つけると一応取り繕った。

「……ただし、家族という単位で見れば醜悪なもの以外の何者でもありませんが。例えば戦争というものが国家単位では正義だとしても、人間一人ひとりにしてみれば悪だと感じられる、という事と同じようなものですね」

どう同じなのかは分からないが、ヒイラギはサカキのキレた屁理屈もウンザリだが、アクビの講釈ぶった屁理屈はもっとウンザリだな、と感じていた。

「さて、先ほど真人さんと話した結果、真尋くんの心の傷を考えると警察には通報しないという事で同意を得ました。真尋くんには腕の良い医者も付けてますし、今日一日ゆっくり休んでもらって、落

ち着いたらただの家出だったということで帰ってもらう事にしましょう……」

マチには医者が三人いたが「腕の良い」が付くのは、女医のチロルくらいのものだ。

まあ、チロルに任せておけば問題ないだろう……。

ヒイラギは一人思った。

「……さて、残る問題は稲葉俊介の処分という事になりますが……」

アクビの問題提起に答えるように、今まで沈黙を守っていた藍沢真人が口を開いた。

「……銃を、銃を貸してもらえませんか」

サカキは当たり前と言わんばかりに、その願いを無視した。マチの外のまともな人間に面倒ごとを起こさせるわけにはいくまい。

だが、クロツチは、驚く程あっさりと自分の銃を真人に手渡した。

「ありがとうございます」

真人は小声で礼を言うと、椅子に縛り付けられた稲葉の正面へと歩き、眉間に銃口を突きつけた。

稲葉の目が丸く、大きく見開かれる。

「うおおおおおおおおおおおおおお」

真人の怒号とも悲鳴とも分からぬ絶叫が部屋中にこだました。

53

藍沢真人は力なく、その場に膝をついた。

だが、引き金は引かれていなかった。

真人がしゃがみこむ手前の床に、小さな水溜りが出来ている。稲

葉は失禁していた。
真人はどうにか立ち上がり、もう一度稲葉の眉間に銃口を突きつける。
カタカタと震える銃身を、アクビが静かに押さえた。
「もう、良いでしょう」
うっ、うっ、と真人の嗚咽が響く。
その様子を見ていたヒイラギは、それで良いよ、あんたみたいなまともな人間が、俺たちの真似事をする必要はないよ、と心の中で呟いた。
どうしたら良いか分からず「……私は……私は」と繰り返す真人に、アクビが宥めるように声を掛けた。
「こんな事になって辛いでしょう……真人さん、あなたの気持ちは良く分かります……そこで、一つ提案があるのですが」

……雲行きが怪しくなってきた。

「実は私、こういう仕事もやってまして」
名刺を取り出す。そこには、貸し部屋あります　メゾン・ド・アクビ　と書いてある。
「私の報酬の一部を頭金としてサービスさせて頂きますので、彼を監禁してゆっくり考えてみてはいかがでしょうか？　殺す決心が出来たら殺せば良いですし、死ぬまでいたぶるのも、気が済んで開放するのもあなた次第です」
活気を取り戻した藍沢真人が「ぜひ、お願いします」と答えるのに、それほど時間は掛からなかった。
そう答えた時の笑顔には、いやらしいほどの悪意が満ちていた。

## 54

やつれ果てた姿ながら、確かにそこに鬼がいた。

毎月の家賃や管理費、稲葉の食費等の料金説明を要領よく真人に話しているアクビを、サカキとヒイラギが阿呆の様に眺めていると、マンションの有効活用と多岐に渡る事業の一例として、何枚かの名刺を見せてくれた。
そこには、ラブホテル　ＨＡＮＡよりＡＫＵＢＩ、ＳＭルーム　アクとれす、漫画喫茶　アクビ館などがあった。
皆方唯の旅行代やらで必要以上に経費は掛かっていたはずだから、ヒイラギは内心アクビは元が取れるのかと要らぬ心配などしていたが……なるほど、しっかりしてやがる。
感心を通り越して呆れ果てていると、説明を済ませたアクビが、サカキとヒイラギに声を掛けた。
「と、いうわけで、稲葉を四階にある部屋まで連れて行って下さい」

いつもなら、それぐらいのついで事、引き受けるくらいどうという事もないのに、珍しくサカキが断った。
「いや、俺たちの仕事は藍沢真尋を見つけるまでという事だったので、これで失礼させてもらいます」
「……ここでお別れですか？」
アクビが尋ねるが、サカキはその質問には答えない。
「後の事は、クロッチさんお願いします。それと、報酬は後でちゃんと貰いにいきますんで、ヨロシク」
短くなったタバコを靴の踵で揉み消す。そして、サカキは後ろを振り返る事もなく、さっさと出口へ向かった。
慌ててヒイラギも後を追う。
クロッチが、部屋の外に待機させておいた部下に、稲葉を四階に連れて行くよう声を掛けた。
ヒイラギがちらと見ると、形式的なものではなく本当に残念そうな顔で、アクビが部屋の出口を見つめていた。

紫煙を燻らせながら、しかしサカキはしっかりとした足取りで先を行く。
声を掛けそびれたヒイラギは無言のままでその背中についていく。
程なくして出た屋外で、ジャンクの間を生温い風が通り過ぎていった。
ヒイラギはサカキの背中から視線を外すと、一度だけ振り返る。
宵闇の中で立つ「東のマンション」は紛れもなくこのマチの墓標のようにそびえていたが、そこに分厚い雲間から覗いた月光が注ぐのが見えた。
それはどちらかといえば「兆し」とか「始まり」のようにも見えて。
物語の終わりにしちゃ締まらないな、そう思った。

## 55

その日、ヒイラギは食料品入りの大きなビニール袋を両手に下げ、町からマチに帰る途中だった。
あれから一週間しか経っていないが、気温は上り調子で、流れる汗でシャツが背中に貼り付き、一歩踏みしめるごとに体力を消耗するようだ。
今までの分を取り戻そうとしているのか、ギラギラと照りつける太陽を目を細めて恨めしそうに見つめるが、ヤツは攻めの姿勢を崩さない。
物事の表面と本質は別物だ。
それはM市へと至る峠を目前に、以前ヒイラギが思ったことだ。
だが、本質を知らなくて良い事もあるのだと今更ながらにヒイラギは思う。

自分達は町の人間とは違う。彼らのように陽のあたる空を目指し高く高く飛ぶことが出来ない事くらいヒイラギだって知っているつもりだ。
自分達はせいぜいが薄暗い下水管の中で飛び跳ねるのが関の山。
いつかは失速し、落下しては地に塗れる。
あのプラスチックゴムのオモチャのように……。
そんな生き方しか出来ないからこそ、この最低のマチで生きていくのだ。

マチの外で正常な人間としては生きてはいけなから……。

あの時まで確かにそう思っていた。
だが、あの日の藍沢真人の顔を見た時、ヒイラギは直感した。

――本当は、マチの中にも外にも、まともな人間なんて存在していないのかもしれない……。

本質が物事の真実であるというのなら、知らない方が幸せということだってあるだろう。
真実を求める必要がないなら尚更だ。
自分達は「何でも屋」であって「探偵」ではないのだから……。

その後、稲葉俊介が殺されたのか、まだ生きているのかヒイラギは知らないし、別に知りたいとも思わない。
町で一番大きな橋の上に差し掛かった時、橋の下を流れる川が潮の香りを運んできた。
そういえば、今年は柄にもなく、サカキが海に行こうと言っていた。

遅ればせながら、本当の夏がやって来る。

終

## ドレインホッパー　5（後書き）

OP
BOOM　BOOM　SATELLITES
「PILL」

ED
吉井和哉
「WEEKENDER」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9193u/

---

ドレインホッパー　Ｒ・Ｎ・Ｏ/１

2011年10月2日03時38分発行